

# 事後的解釈場面における概念分析

——自明性の喪失を呈した事例による——

田澤安弘

## 目次

- I. はじめに
- II. 事例の概要
- III. 事前につすべき視点
- IV. 反応カテゴリー
- V. 反応の解釈
- VI. 考察
- VII. 結語

## I. はじめに

私は、ロールシャッハ・テストにおける従来の解釈法を超えた「概念分析」なる手法を提起したが(田澤, 2006), これはその続編である。本論では、具体的なロールシャッハ状況における即時的解釈ではなく、概念分析による事後的な解釈について、具体的な事例に即して論じるつもりである。

事後的な解釈場面における概念分析は、先立つロールシャッハ状況における理解を継承しながら、プロトコルの顕著なアスペクトに着目してボトム・アップ的に理解する側面と、査定者があらかじめ持っている認識関心にしたがってトップ・ダウン的に理解する側面からなっている。これら二つの側面は表裏をなしており、本来的には分離することなどできないのかもしれないが、本論では概念分析の実際を提示する必要があるので、あえて別々に分けて論じることにする。

呈示する事例は、統合失調症と紛らわしい

病態像すなわち自明性の喪失を呈した患者である。重篤な症状が発症する直前である1回目と、それが慢性化ないし固定化した状態である2回目のプロトコルを比較することで、変化した体験空間の様相を明らかにしたい。

なお、本人の承諾は得ているが、プライバシー保護のために、精神病理学的事象に影響が及ばないかたちで修整と脚色が加えられている。

## II. 事例の概要

### 1. 事例

A子, 精神科初診時38歳, 既婚, 女性。

### 2. 生育歴

公務員の父と専業主婦の母との間に長女として出生する。出生順位は兄, A子, 妹の順であるが, 兄は幼少時に交通事故で他界している。父親は仕事をきちんとこなす人であったが, 長男が死亡してからは家庭で飲酒することが多く, A子にとっては「ただの酔っ払い」にすぎなかったようである。母親も「あれこれうるさい」存在であり, A子はいわゆる機能不全家族に育ったといえるであろう。

A子は, 10歳代の頃は親の言うことをよく聞く「いい子」であった。しかし, 親が妹よりもA子に期待をかけて何かと優遇するので, 妹からは「いつも姉ちゃんばかり……」

と非難されることが多く、同胞葛藤が強かった。妹はアルコール依存症やギャンブル依存症のために、20歳代後半から精神科に入退院を繰り返している。

大学進学と同時に、A子は実家を離れて一人暮らしを始める。異性関係は流動的で、A子曰く「数え切れない」ほどの男性の間を渡り歩いた。大学卒業後ある不動産会社に就職し、20歳代後半で結婚する。結婚後も仕事を継続して会社内での地位を上げていったが、その反面、夫との関係は希薄になっていった。子どもはない。結果として、結婚後7年を経過した時点で離婚し、学生の頃のように異性関係が流動的になる（学生の頃も含めると4～5回墮胎を繰り返している）。そのような生活の中で、次第に下記の諸症状が増長し、以前のように仕事に没入することがまもなくなくなっていった。

### 3. 現病歴と症状

頭重、肩こり、腰痛、喉に塊がある感じ、倦怠感、抑うつ、イライラ、入眠困難、集中困難などが増長し、まずA内科クリニックを受診する。しかし、内科的な異常がないことから精神科受診を勧められ、次にB精神科病院を受診する（1回目のロールシャッハ・テスト施行）。精神科受診は初めてであり、このときA子は38歳であった。ここでは、精神科医による薬物療法と構造化された精神療法によって治療が開始されたものの改善の兆しが見られず、3カ月の通院だけでみずから治療を中断している。

その後、C内科クリニック、D大学付属病院内科、同じくD大学付属病院精神神経科、E脳神経外科病院などの外来を転々とするが、本人曰く「悪くなるばかり」であった（A内科およびB精神科受診からここまで1年3カ月が経過）。結局会社を退職して、F整形外科病院に椎間板ヘルニアを理由に一年半ほど入院している。だが、牽引や鎮痛薬の服薬

といった保存療法のみで、外科的な治療は受けなかったのだという。

そして、そこを退院したあと、G精神科病院を受診する（2回目のロールシャッハ・テスト施行）。ここでは、上記の症状に加えて、離人症を思わせる訴えがあった。この症状が現れる側面を「外界意識面」「身体意識面」「自我意識面」の三つに分類すると、A子の症状は次のようになるであろう。すなわち、外界意識面の疎隔感ないしリアリティの喪失：「見るもの全てが薄っぺらになって立体感がない」、「音が（音源から）違うところから聞こえるし、水に潜ったときのような変な感じで聞こえる」、身体意識面：「脳が固くなったりドロドロになったりするような違和感がある」、「頭に輪がかかったような、絞めつけられる感じ」、「身体が思うように動かないし、頭も回らない。身体がただの肉の塊のよう」、「歩くとグラグラする」、自我意識面：「みんなバラバラになって繋がりが無い。テレビを見てもストーリーが分からないし、動きがブツブツ切れて見える」などである。

加えて、Blankenburg, W. (1971) が記載した「自明性の喪失 (Verlust der Natürlichen Selbstverständlichkeit)」である (natural self-evidence なる英訳を見かけるが、natural self-raising into existence のほうが原意に近い)。この自明性の喪失様の症状を、A子は次のように訴えている。すなわち「箸とフォークのどっちを使えばいいのか分からないんです。そんなこと、いままで考えたこともありませんでした」、「シャンプーとリンスが分からないんです。いちいち考えて行動しなくちゃならない」、「茶碗を洗っていて急におなか痛くなったとき、自分が流し台に排便しようとしているのでびっくりしました」、「デパートでトイレに入る前に（人がたくさんいる売場で）服を脱ぎだして、一緒にいた友達にとめられた」などである。

離人症と自明性の喪失の違いは、たとえば前者が「自分の身体が自動的に動いているのを傍観している」のに対して、後者が「行為の一挙手一投足を意識しなければならない」という点にあり、その意味で後者のほうがより重篤であると考えられる。A子には、これら両方に該当する症状が一時的にあったといえるであろう。

20歳代においてすでに「どことなく体調がすぐれない」ことを自覚していたようだが、そのためにA子が医療機関を受診したことはなかったようである。セネストパチー様の症状、離人症、自明性の喪失様の症状などは、B精神科病院を受診した頃にはなかったものの、そこを離れてから一年後F整形外科病院に入院した頃にはすでにあったのだという。ただ、「頭が変だと思われるのがいや」で、担当医にそのことを告げることはなかった。

#### 4. 治療経過とパーソナリティ

私は、B精神科病院を退職したあとG精神科病院に勤務したのだが、偶然A子が私の勤務していた二つの病院を受診したものであるから、前者では心理査定のみ、後者では心理査定と心理療法を担当することになった。G精神科病院では、精神科医の薬物療法と臨床心理士の心理療法によって治療が開始された。

私は、支持的な姿勢で現実的な問題を取り上げて話し合うタイプの心理療法によって、A子と三年間関与し続けた。その間、彼女の重大なライフ・イベントや日常的なストレスと平行して症状は変動し、回復は遅々としていた。私の移動のために心理療法を終結する頃には自明性の喪失様の症状は漸次回復していたが（この症状自体は発症から2～3年で緩和されるに至っている）、今度はアルコール嗜癖の問題が焦点となりつつあって、いずれにせよ就業するレベルにまでは回復していない。精神科医は、A子の統合失調症

を否定している。

A子のパーソナリティは、情緒的な冷たさや相手への関心の欠如などは過度のものではなく、DSMの「自己愛性人格障害」の診断基準を満たしているわけではない。しかし、自分以外の人たちにもそれぞれの気持ちや都合があることに気づくことができないような共感性の欠如、かつてみられた異性関係における衝動的な行動、アルコール嗜癖、かつて自分が成し遂げた職業上の業績を誇張して他人を過小評価すること、自分の苦しみを自分が思うように相手が理解していないと慥然として反撃すること、といった特徴が心理療法において認められ、広い意味では自己愛的、嗜癖的なパーソナリティであるといえるであろう。

心理療法を開始してから3カ月が経過した頃、あちこちの病院を転々としていたことの原因としても理解されるが、やはりA子と私との治療関係は逼迫したものとなった。というのは、A子が「こんなに調子が悪いのにどこにも異常がないのはおかしい」と詰め寄り、侃々諤々の面接になってしまったからである。あらゆる医学的検査によって異常のないことはA子も重々承知していたはずであるが、やはり苦しさのあまり同じ疑問が頭をもたげたのであろう。私はそのとき、およそ次のような説明をした。すなわち、何らかのストレスによって生理的破綻が惹起され、それに伴って離人症や自明性の喪失へと至ったのであろうが、その生理的破綻はいまのところ医学的には証明されないことなのだ。そして、原因を解明することはできないけれど、それから今ある痛みから解放することにはならないが、A子の苦しみがどんなものであるのか、それについては心理学的なレベルで何かいえるかもしれないからと、ロールシャッハ・テストを提案したのである。

1回目のロールシャッハ・テストから2回目のそれまで、ちょうど3年の隔りがある。

いずれも私が施行したものである。1回目はB精神科病院において、2回目はG精神科病院においてである。1回目は、治療開始前に見立てを得る目的で、精神科医から依頼を受けて施行された。2回目は、上記の通りである。

### 5. 興味深い現象

2回目のロールジャッハ・テスト施行後、検査結果をフィードバックする際に行なわれたものであるが、私は図と地の反転図形である「ルビンの盃」をA子に提示して、何に見えるか質問した。すると「顔にもカップにもどっちにも見えます」という返答であった。混淆を示唆する「顔-カップ」のような言語新作はなかったものの、一方を選択することが困難であることが理解された。

それからA子には、「ものが二重になって見える。近くのものを見ると遠くのものも二重になって、遠くのものを見ると近くのものも二重になって見える」という複視(片眼複視ではなく両眼複視)を思わせる訴えや、「指の向こうが透けて見える」、「人の下半身がない。壁が透けて見える」などの、半ばオカルト的な奇妙な訴えがあった。もちろんA子には、両眼複視を引き起こすような斜視や眼筋麻痺、視野狭窄、それから脳神経外科的な病気などは認められない。

指の向こうが透けて見える現象については面接場面で再現してみたが、眼前に一方の手を(指先を開いて)定位して見つめてもらうと、「やっぱり透けて見える」と不安がっていた。これは、両眼による現象である。次に一方の目を閉眼して片眼で見つめるように指示すると、透けて見えることはなくなった。

この「透けて見える」体験と両眼複視?は、同じ現象の異なる表現なのであろう。つまり、一方の視野では指先を開いた手が図化され、他方の視野では手の背景に広がる空間が図化されているのだが、それらが両眼によって同

位的に等置されることで、時間のズレなしに、二重露出的に渾然一体となって図化されているのである。このような現象は、視覚が正常に機能するかぎり誰にでも生起する正常な事態なのであろうが、ただ多くの人はそのようなことに無頓着でいられるはずである。

また、下半身のない人間の認知であるが、これも指の向こうが透けて見える現象と同様の機制が作動しているのであろう。ただし、目の前を歩行する人の運動知覚の現象であるから、空間だけでなく時間の視点を加味する必要はあるに違いない。

## III. 事前に持つべき視点

離人症の症状は、Stratton, G.M. (1896, 1897)の逆転視野の破壊実験によって生じる空間の解体と類似している。ここで両者を比較して、離人症ないし自明性の喪失という状態像を理解するための仮説を導出しておく。

中村(1979)は、牧野(1970)を参照して、以下のように叙述している。すなわち「視野逆転は自己-外界の正常の知覚体制を破壊するものである。そのために視空間が動揺し、視空間のリアリティが失われていき、視空間の空間枠組は基準としての機能を失う。その結果、自己が定位の基準となり、自己中心的な定位がみられる。これに対して、逆転視野への適応は、視空間のリアリティと安定性の回復であり、視空間の空間枠組が定位の基準となる機能の回復である。つまり、視空間が未分化で不安定な場合には自己中心的な定位がみられ、視空間が安定をとりもどすとき、それが定位の基準となって自己の定位を規定することになる」である。

さらに中村は「逆転視野への適応の第一段階でみられたことは、諸感覚の主體的・主語的統合たる〈視覚的統合〉が解体して、基体的・述語的統合たる〈体性感覚的統合〉が顕在化し、基準になったということである。つ

いで第二段階でみられたことは、その〈体性感覚的統合〉の基礎の上に主体的・主語的統合たる〈視覚的統合〉がともかく再組織されて、今度はそれが基準となり、逆に〈体性感覚的統合〉に規制力をもって働きかけてきたということにほかならない」と述べ、逆転視野への適応は「諸感覚の弁証法的統合構造を裏づける」としている。

一方 A 子には、身体感覚の違和感や複視だけでなく、見えている音源とは一致しない方向から聞こえる視覚と聴覚の「感覚間の不一致 (intersensory disharmony)」、頭や身体の動きが自己身体の動きではなく視野の激しい浮動ないし動きとして知覚される「視野の動揺 (swinging of the scene)」、視空間の異様な感覚すなわち視野の平板化ないし平面化、リアリティ低下、意味喪失などの症状が認められた。視野の平板化ないし平面化については、Stratton の言う「異様な光景」との異同は定かではないが、その他については両者が極めて近似していることが理解されるであろう。

Merleau-Ponty, M. (1945) は、視野の倒立と非現実性、それに視野の正立と現実性について、それぞれ身体によって空間が「生きられているか」あるいは「生きられていないか」の違いによるとしているが、A 子の離人症や自明性の喪失、つまり視野の浮動、リアリティ低下、意味喪失なども、空間が身体によって生きられていないことを意味しているといえるであろう。ただし、Stratton の実験では、「受動的に外界を眺めているとき (passive observation)」よりも「能動的に外界に働きかけているとき (active operation)」の方が視野の正立と現実性が生き生きと感じられるのだが、A 子の場合には、能動的に働きかけることが生き生きとした感覚を生み出すということは皆無であった。

これらのことから、A 子の空間の定位について、以下のような仮説を導出することがで

きるであろう。離人症ないし自明性の喪失は、逆転視野への適応に見られる二つの段階のうち、第一段階で見られる状態が永続化したものと見なすことが可能である。すなわち、自己-外界の正常な知覚体制が破壊され、そのために視空間が動揺し、さらには視空間のリアリティが失われていき、視空間の空間枠組が定位の基準としての機能を喪失した結果として、自己が定位の基準となって自己中心的定位が発現するということである。中村の言葉でいえば、諸感覚の主体的・主語的統合たる〈視覚的統合〉が解体して、基体的・述語的統合たる〈体性感覚的統合〉が顕在化し、それが基準になると言えるであろう。これは、筆者 (田澤, 1995) がかつて「受動的知覚モード」と呼称した事態である。

もしも、この仮説が妥当なものであるなら、A 子のロールシャッハ・テストには自己身体が定位の基準となる自己中心的定位を示唆する反応が多く認められるであろう (もちろん本論は、仮説の検証を目的とするものではない)。次に、身体と空間の分節について、発生的・発達の視点から考えることにする。

廣松 (1972) は「自己の身体の四肢の区別が、その後のあらゆる場所規定の出発点となる。人間にとってひとたび自己の身体像が明確に形づくられたならば、つまり人間が身体を自己完結的で分節構造をもった有機体として捉えたならば、この身体はいわば人間がそれになって世界の全体を構築するモデルの役を果たすのである」と述べている。しかしながら、自己完結的な分節構造をもった身体像が明確に形成される以前に、未分節な次元の身体によってすでに世界が構成され得ることは、発達心理学の知見からも言えることである。例えば、Werner, H. (1948) の発達論から言えば、子供が自己身体に中心化された左右を区別するようになるのは、上下や前後などの区別と比較して遅く、6~7歳頃である。他人の身体の左右を区別するのは、そ



れよりもやや遅れて8～9歳頃である。そして、9～10歳頃になると、脱中心化された操作的座標系が組織されて様々な方向性に着目しはじめ、11歳頃には左右を物の特定の性質として理解することが可能となる。このように、身体による世界構成は、未分節な低次の構造から分節化した高次の構造に至るまで、発生的に段階づけられるのである。

その後、Wapner, S., and Werner, H. (1957, 1965) は、「感覚トーンヌ場の理論 (sensory-tonic field theory)」を発展させて、空間知覚に関してさらに詳細に論じている。以下に要約する。

われわれの空間の「座標系 (frame of reference)」は、物としての身体が場のどこに位置しているのかに関する情報である、心理-物理的な外的姿勢と、力の配分 (神経分布パターン) としての、心理-生理的な有機体の内的状態 (態度ないし身体的トーンヌ) との、系統的な関係によって規定される。この座標系が安定するためには、つまり「大域的知覚 (global perception)」が減少して「諸部分への分節化 (articulation of parts)」が増大するためには、発達的に、身体 (自己) と対象 (環境世界) の「分極性 (polarity)」が増大していくことが必要である。

われわれの身体知覚と対象知覚は、生理-心理的な統一体である。「身体図式 (bodily framework)」なしにそこにある対象を知覚することはできないし、座標系としての環境なしに物としての身体を知覚することもできない。そのような統一体の両極である自己と対象が未分化であること、すなわち「癒合性 (syncretism)」は、まず「自己中心性 (egocentricity)」というかたちで現れる。自己中心性とは、自己を基準として対象世界を規定すること、あるいは対象を自己に「同化すること (assimilation)」である。発達の早期における自己中心的空間であるが、その「座標系」は、身体に近い手元の刺激が身体の位

置や姿勢の変化に関連づけて解釈されることによって形作られている。そのため、手元の刺激は身体的姿勢に関連づけられ、静止した対象であっても姿勢が変化するたびに違うものになると体験される。自己中心的な空間の体制化には、「物の恒常性 (thing-constancy)」が欠如しているのである。

自己と対象が未分化であることは、「刺激-拘束性 (stimulus-boundedness)」というかたちでも現れる。刺激拘束性とは、刺激のなすがまままになって有機体がそこからの独立を維持することができないような異常な適応、あるいは新たな刺激や刺激の変化に対して有機体が強く同調してしまうことである。この刺激拘束性にも物の恒常性が欠如しているので、それが外的姿勢の変化と有機体のすばやい内的状態の変化によって左右されることは確実である。「対象恒常性 (objective constancy)」は、姿勢と内的状態という二つの要因が明瞭に分節化して、互いに系統的に結びつくときに現れるのである。

この両者が系統的に結びついていない場合には、以下のようなことも起こってくる。たとえば、有機体の状態から独立して姿勢だけが働くと、極端な自己中心的空間知覚になる。反対に、姿勢から独立して有機体の (内臓的かつ筋肉-骨格的な) トーンヌだけが働くと、極端に刺激拘束的な空間知覚になる。さらに、両者の系統的な結びつきが崩壊ないし「脱-分節化 (dedifferentiation)」すると、統合失調症者のように、自分の側の運動-姿勢的活動にもかかわらず「世界が回っている」と理解されることになる。発達的に言っても、いずれか一方が優勢であれば、両者が系統的に結びつくように発達することが阻止される。

逆転視野に関する知見から自己中心的空間知覚に着目すべきことが理解されたが、それに加えて、Werner からは (自己中心性と) 癒合性と刺激拘束性に着目すべきことが理解された。ロールシャッハ・テストを解釈する

以前に持つべき視点は、癒合性（大域的知覚と諸部分への未分節）、自己中心性（自己中心的空間定位、対象の同化）、刺激拘束性、この三点である。

#### IV. 反応カテゴリー

具体的なロールシャッハ状況における暫定的解釈を足がかりとして、事後的にプロトコールを何度も読み込み、ボトム・アップ的にカテゴリーを作成して反応を分類した。まずは、癒合性、自己中心性、刺激拘束性という三つの認識関心によるのではなく、プロトコールの顕著な側面に着目して分類したものである。

表1は1回目の反応を、表2は2回目の反応を、それぞれクロス・テーブルにして要約したものである。該当する反応に対して 'p' の文字を記入してある。表3は、後述する各反応カテゴリーの定義に合致した言語表現の部分を抜粋したものである。表4のプロトコールは、左側が1回目、右側が2回目のものである。記号化は、Klopfer, B. et al (1954) と片口 (1987) にしたがっている。なお、反応領域記号の後の ( ) 内は、Hemendinger, L., and Schultz, K.D. (1977) のクラーク大学方式発達スコアである。作成された反応カテゴリーは、全18カテゴリー + 9下位カテゴリーから構成されている。以下に各カテ

表1. 1回目の反応カテゴリー

	1	1   1	1   2	1   3	1   4	1   5	2	3	3   1	3   2	3   3	3   4	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
I 図版①																												p
②	+		p																									p
③	+	p																										p
④																												p
⑤																						p	p					p
II 図版①								+		p																		
②																												p
③																												p
III 図版①	+		p		p		p					p		p														p
②																												p
IV 図版①	+		p					+	p												p		p					
②	+		p					+	p														p					
③	+	p						+		p													p					
V 図版①	+		p																									p
②																												p
VI 図版①								+	p																			
②								+	p																			
VII 図版①												p		p														
②								+	p			p		p														
③																												p
VIII 図版①								+		p		p		p														
②																												p
IX 図版①																												
②																												p
X 図版①								+		p																		p
②							p					p																p

ゴリーの定義を順に示す。

第一のカテゴリーである「1. 主題・述語の揺らぎ」である。これは、主語部分と述語部分からなる主題が一義的に確定されないか、あいまいな表現をとることによって、確固と

述定されることなく揺らぐものことである。

下位カテゴリーとして、主題が確固と述定されずに、あいまいな表現をとる「1-1. あいまい」、主語部分に限定するが、主題の抽象度に揺れ動きがあって一義的な意味が確定

表 2. 2 回目の反応カテゴリー

	1	1   1	1   2	1   3	1   4	1   5	2	3	3   1	3   2	3   3	3   4	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
I 図版①																			p								p
②	+		p					+	p			p											p				p
③												p			p												
④								+			p										p						p
II 図版①				p	p			+	p	p	p	p		p					p			p		p			p
②	+		p	p				+		p	p	p		p					p								
III 図版①	+		p					+	p			p		p							p		p				p
②	+		p	p				+		p	p												p				p
③	+		p					+	p						p								p				p
IV 図版①	+		p	p				+	p										p		p		p	p	p		
②	+		p	p				+	p		p												p				
V 図版①																				p		p	p		p		p
②								+	p	p	p									p							
③																											p
④	+			p				+		p										p			p		p		
VI 図版①	+		p					+	p												p	p	p	p		p	
②	+		p					+	p										p		p	p	p	p			
③	+		p									p		p						p	p	p					
④	+					p															p						p
⑤	+		p					+		p	p	p								p	p	p	p				
VII 図版①	+		p					+	p	p	p	p		p						p							
②								+	p	p	p	p								p						p	
③																p					p						p
④	+		p	p				+	p	p	p	p		p						p	p	p	p				p
VIII 図版①																				p	p				p		p
②	+		p					+		p	p	p	p								p					p	
③	+		p		p						p										p		p				p
IX 図版①	+		p	p						p	p	p		p													p
②																											p
③								+	p		p										p						p
④	+		p								p										p						p
⑤	+							+		p	p	p											p				p
⑥																											p
⑦	+		p					+		p	p																p
X 図版①	+		p	p	p			+		p	p		p									p	p				p
②								+	p												p	p	p	p			p



表 3. 具体例-1

番号	カテゴリーの名称	回/比	具 体 例
1	主語・述語の揺らぎ	比	1回目の反応数：2回目の反応数 1回目の反応数／反応総数：2回目の反応数／反応総数
1-1	あいまい	比	2：0 2/26：0
		1回目	「何か得体の知れない化け物みたいの、柱でも何でもいい 1-3」 「化け物 4-3」
		2回目	なし
1-2	主題の変転	比	5：15 5/26：15/36=1：2.2
		1回目	「蛾……クモ……いわゆる昆虫 1-2」「火か何か、メスカな……オスカな 3-1」「熊……たぬき……アライグマ 4-1」「動物……熊……わけの分からない動物 4-2」「昆虫……チョウチョ類……飛ぶもの 5-1」
		2回目	「ハロウィンのかぼちゃ……悪魔……ハロウィンのかぼちゃにとりついた悪魔 1-2」「獣……熊……熊か何だかアザラシか何だかそういう動物 2-2」「何か抉り取られた内臓……ずたずたになった心 3-1」「クモだとしたら怨念……幽霊だったら火の玉……執念……恨みつらみ 3-2」「血……脳みそ……脳みそ(をかち割られてる)……甲羅(をかち割られてる) 3-3」「トラックに……ダンプとかトレーラーとかに……ローラーか何かで潰された 4-1」「牛みたいな化け物……牛みたいな生き物……牛……牛とは一概に言い切れないけど 4-2」「敷物になった獣……狐なんだか……狼なんだか 6-1」「花……花だけど花の断面図……ゆり……チューリップ……カトレアでもいいけど 6-2」「狸……アライグマ 6-3」「カブトガニ……ゲンゴロウ……甲殻類 7-4」「カトレアみたいな花……食虫花……あやめとかカトレアとか 8-3」「ドラゴン……タツノオトシゴ……ドラゴン……タツ……タツノオトシゴ 9-1」「オレンジだから夕焼け……ピンクだから夕焼け 9-4」「妖精……女の幽霊 10-1」
1-3	主題の一変	比	0：13 0：13/36
		1回目	なし
		2回目	「得体の知れない不気味な生き物、やっとかすっとか支えあっている……手と手を合わせることで相手の体液を吸い取って自分だけ生き延びようとしている……しゃがんでこう手を合わせているような。さっきはしゃがんでいるようには見えなかったんだけど 2-1」「血を流しながらうごめいてる……向かい合ってる……死にかけている……一緒に死んでいく……苦しんでいるのが向かい合ってる……逆立ちして向かい合ってる 2-2」「飛びかかってこようとしている……つかみかかるようにして凄んでいる……今にも飛びかかってきそうな 3-2」「押しつぶされた……轢かれた 4-1」「息も絶え絶えになってる……何とか進もうとするんですけど死にそうなので進めない……泣きたいけど泣けない……今にも泣き出しそうな 4-2」「立ち上がって……羽ばたきたい……違和感持ってる……飛びたいけど飛べない……神様につけてもらった……途方にくれている……嘘までついて……翼広げて立ってる 5-4」「あっ、何かこうすると陸地……あっ、有珠山どうにかしてる……噴火してる……逆さに映ってる……噴煙が上がってる 6-5」「捻じ曲げて向かい合ってる……振り向いて……お互いに向き合ってる……ねじってるとも振り向いてるとも 7-1」「のっかっている……へばりついてる 7-4」「つたってる……落ちなさいい……前に進めない……どうしようかって思ってる……意欲は強い 8-2」「水に映ってる……入ろうとして……陸に上がりたい 9-5」「入ろうかどうか……出ようかどうか 9-7」「行こうとしてる……行きたがってる……出たがってる……向かっている 10-1」
1-4	部分的徴候による主題の変化	比	1：3 1/26：3/36=1：2.2
		1回目	「ここ見たら雌かなと……でもここあるから雄かな 3-1」
		2回目	「死にかけた二人がやっとかすっとか支えあってる→これ手に見える→相手の体液を吸い取って自分だけ生き延びようとしている 2-1」「これがなかったらただの花だけど、ここにこだわってしまった(食虫花) 8-3」「見たときに不気味な顔つきというか、そうすると妖精ではなくて、幽霊になっちゃうんですね。10-1」

表 3. 具体例-2

番号	カテゴリーの名称	回/比	具 体 例
3	動のAspect	比	
3-1	既然態	比	5 : 13 1 : 1.9
		1回目	「つぶされた 4-1」, 「つぶされてる 4-2」 「引き伸ばされた, ひき潰された, 轢かれた 6-1」 「ベチャっとなってる, 潰されている 6-2」 「むしられた 7-2」
		2回目	「悪魔がとりついた 1-2」 「血だらけになってる, 破裂した 2-1」, 「何か挟り取られた, ズタズタになった, 入るべき内臓が飛び出してる 3-1」 「頭をかち割られた, 脳みそをえぐられて, かち割られてる 3-3」 「押しつぶされた, 轢かれた, ペタンコになっで、ベタッとなっちゃった, ペタンコになってる 4-1」 「潰されている 4-2」 「翼を広げた 5-2」 「ノッペリしちゃって, 潰された 6-1」 「スライスした, 真っ二つにした, スパッと切った 6-2」 「あがっちゃってる 7-2」 「背負った, つぶされてる, ベタッとなってる 7-4」 「枯れてる 9-3」 「スパッと切ったような, 真っ二つにしたら 10-2」
3-2	進行態	比	5 : 11 1 : 1.6
		1回目	「手を合わせてる 2-1」 「睨まれている 4-3」 「登って行ってる 8-1」 「吹き出している 9-1」 「手をつないでいる 10-1」
		2回目	「手を合わせている, しゃがんでいる, 支えあっている 2-1」 「血を流しながらうごめいている, 血を出してて 2-2」 「凄んでいる, 漂っている, 牙むき出して 3-2」 「翼を広げているところ 5-2」 「立ち上がってる, 翼広げて立ってる 5-4」 「噴火してる, 噴煙が上がってる状態 6-5」 「ねじってる, 振り向いてる 7-1」 「差し出してる, 振り向いてる, 逆立ってる 7-2」 「へばりついてる 7-4」 「つたってる 8-2」 「飛び回ってる, 向かっている 10-1」
3-3	愕然態	比	0 : 10 0 : 10/36
		1回目	なし
		2回目	「死にかけてる 1-4」 「死にかけた, 生き延びようとしている, 生き残ろうとしている 2-1」 「死にかけている 2-2」 「飛びかかって来ようとしている, つかみかかろうとしていて, いまにも飛びかかってきそうな 3-2」 「進もうとするんですけどまったく動けない, 死にそうなので進めない, 泣きたいけど泣けない, 今にも泣き出しそうな表情……息もたえだえになってる 4-2」 「羽ばたきたい, 飛びたいけど飛べない 5-2」 「前に行こうとして, 前に行きたい 8-2」 「入ろうとしてて, 陸に上がりたい 9-5」 「入りたがってる, 出たがっている, 入ろうかどうしようか, 出ようかどうしようか 9-7」 「行こうとしてる, 行きたがってる, 出たがってる 10-1」
3-4	単純状態態	比	5 : 19 1 : 2.7
		1回目	「向かい合った(ている) 3-1」 「向かい合ってる, 向き合ってる 7-1」 「スーパーに並んでる 7-2」 「登る熊, 対になってる 8-1」 「取り巻く 10-2」
		2回目	「釣りあがっている, 裂けている 1-2」 「向かい合ってる, つかまって向かい合ってる 1-3」 「苦しそうな顔してる, はみ出てる, 逆立ちして向かい合ってる 2-1」 「苦しんでいる 2-2」 「向かい合ってる 3-1」 「途方にくれている, ほっぺた膨らんでる 5-4」 「背中合わせになった, 背中合わせになってる, くっついてる 6-3」 「映ってる 6-5」 「捻じ曲げて向かい合ってる, お互いに向き合ってる, くっついてる 7-1」 「映してる, びっくりしてる 7-2」 「のっかっている 7-4」 「映ってる, つたいながらどうしようかかって思ってる 8-2」 「垂れ下がった感じ 8-3」 「向かい合ってる 9-1」 「向かい合ってる 9-3」 「映った 9-4」 「映ってる 9-5」 「ただ座ってるだけ 9-7」 「向かい合ってる, まとわりついている, ぶら下がってます 10-1」
4	映る	比	0 : 4 0 : 4/36
		1回目	なし
		2回目	6-5, 7-2, 8-2, 9-5

表 3. 具体例 - 3

番号	カテゴリーの名称	回/比	具 体 例
5	向かい合ってる	比	4 : 8, 1 : 1.5
		1回目	「向かい合った動物が二匹 3-1」「ウサギが向かい合ってる。二匹。7-1」「ニワトリの手羽 7-2」「何か壁を登る熊が左右対称。対になってる 8-1」
		2回目	「お互いに向かい合ってる 1-3」「向かい合ってる人 2-1」「逆立ちして向かい合ってる 2-2」「幽霊が二体向かい合ってる 3-1」「背中合わせになった狸 6-3」「身体を捻じ曲げて向かい合ってるウサギ 7-1」「向かい合ってるドラゴン 9-1」「向かい合ってる妖精 10-1」
6	白図の等置	比	0 : 2, 0 : 2/36
		1回目	なし
		2回目	「甲羅の中 3-3」「何か背負った甲殻類 7-4」
7	地 図	比	0 : 1, 0:1/36
		1回目	なし
		2回目	7-3
8	断面図	比	0 : 2, 0 : 2/36
		1回目	なし
		2回目	6-2, 10-2
9	レントゲン写真・ 模型図	比	1 : 1, 1 : 0.7
		1回目	「レントゲン写真 8-2」
		2回目	「人体模型図 8-1」
10	身振りと自分の 身体を利用した 説明	比	2 : 15, 1 : 7.6
		1回目	5-2, 7-1
		2回目	1-1, 2-1, 2-2, 4-1, 5-1, 5-2, 5-4, 6-2, 6-3, 6-5, 7-1, 7-2, 7-4, 8-1 (ここだけ), 10-2
11	図版の回転	比	0 : 12, 0 : 12/36
		1回目	なし
		2回目	6-1, 6-2, 6-3, 6-4, 6-5, 7-3, 7-4, 8-2, 8-3, 9-3, 9-4, 10-2
12	擬音語・擬態語	比	4 : 10, 1 : 1.8
		1回目	「ふっと骨盤にも見えるし 1-5」「ベチャッと 4-1」「ベチャッと 6-1」「ベチャッと 6-2」
		2回目	「ボロボロ 1-4」「ズタズタ 3-1」「ベターッと, ベタッと, ベタンコ, ベッタンコ 4-1」「ボロボロ 5-1」「ノッペリ、ベタッと 6-1」「スパッと 6-2」「ピタッと 6-3」「モクモク 6-5」「ベタッと 7-4」「スパッと 10-2」
13	瞬 視	比	1 : 7, 1 : 5.1
		1回目	「ふっと骨盤にも見えるし 1-5」
		2回目	「破裂した瞬間の血 2-1」「瞬間的に 5-1」「あっ 6-5」「とっさに思った 7-4」「一瞬きれいな花に見えて 8-3」「何か一瞬 9-5」「一瞬明るいと思って 10-1」
14	図版枠からの越境	比	6 : 11, 1 : 1.3
		1回目	「潰されて 4-1」「潰されてる 4-2」「ローラーで轢かれたような 6-1」「つぶされた 6-2」「羽をむしられた 7-2」「睨まれているような感じが 4-3」
		2回目	「切り抜いて 1-2」「抉り取られた(内臓)3-1」「飛びかかってこうとしている 3-2」「脳みそをかち割られている 3-3」「ダンプとかトレーラーとかに潰された, ローラーか何かでつぶされた 4-1」「潰されているような感じ 4-2」「空を飛びたくて神様につけてもらった(翼)5-4」「ベタッと潰された 6-1」「真っ二つにスライスしたような, スパッと切ったように 6-2」「自分のことだと思う。水子がついているといわれるから 10-1」「スパッと切ったような 10-2」

されていなかったり、最初の主題の同一性が失われてそれが(抽象度において)並列的に二転三転するか単に並列されたりする「1-2. 主題の変転」、述語部分に限定するが、主題の意味内容が最初のそれから変化してしまう「1-3. 主題の一変」、上記の「主題の変転」や「主題の一変」と重複するものもあるが、主語部分であれ、述語部分であれ、インクプロットの一部分に触発されて主題の意味内容が変化してしまったことが明白である「1-4. 部分的徴候による主題の変化」、それから主題の内容は変化せずに、その相貌(内的パターン)だけが変化してしまう「1-5. 相貌の変化」の五つに分類する。

第二のカテゴリーは、ある箇所に述定され

た主題の意味を、インクプロットの他の領域に転位する「2. 主題の転位」である。

第三のカテゴリーは、「3. 動のアスペクト」である。アスペクトとは、「動詞その他用言の意味する動作・作用の進行の相を示す形態の違い」(金田一, 1976)である。何らかの「動」を感じさせる語の使用を、下位カテゴリーとして「3-1. 既然態」「3-2. 進行態」「3-3. 将然態」「3-4. 単純状態態」の四つに分類する。なお、筋肉的運動のみならず、感情などの主観的状态までも含める。

まず「3-1. 既然態」である。既然態とは、以前起こった動作・作用の結果がまだ継続している状態を表わし、それには「～たと

表 3. 具体例 - 4

番号	カテゴリーの名称	回/比	具 体 例
15	文脈への言及	比	2 : 4, 1 : 1.5
		1回目	「スーパーに並んでる(テバサキ)7-2」「キャンプやなんかのときに9-2」
		2回目	「よく黒魔術するときに使うような2-1」「インテリアでありますよね4-1」「オホーツクに行ったときこんな感じだった5-1」「理科の実験室にある8-1」
16	～ちゃった	比	1 : 6, 1 : 4.4
		1回目	「羽が(考えとして)出ちゃった5-2」
		2回目	「ベタッとなっちゃった熊4-1」「ウサギって言っちゃったからウサギなんです5-4」「ノッペリしちゃって6-1」「(髪の毛)上がっちゃってる7-2」「落ちちゃったら8-2」「見えちゃった9-5」
17	色彩の関与・非関与が想定される反応	比	6 : 15, 1 : 1.8
		1回目	「血2-2」「火が何かを困んで、火のイメージ3-1」「チョウチョほど綺麗じゃないです、色がついてないから5-1」「ランプ、内炎と外炎、と明るい感じ9-2」「色合い、ピンク10-1」「黒いクモのような悪魔10-2」
		2回目	「色が黒いのもあるけど1-2」「墨の濃淡の感じが薄汚い感じがする1-4」「マントか何か……黒魔術やるときに使うような。血とか、内臓とか、はみ出してる。顔にしたって血だらけになってる。血しぶき2-1」「頭から血を出して、身体にも血がついて……幽霊だったら火の玉だけど、クモだったら執念3-2」「抉り取られた内臓3-1」「血とか脳みそ3-3」「白い空間が……この白い……それが背中に乗っかっている7-4」「綺麗な花8-3」「炎9-2」「生きのいい葉っぱ、オレンジっぽいから枯れてる9-3」「オレンジだから夕焼けと思ったのかな、ピンクだから夕焼けと思ったのかな、緑のが雲です9-4」「色からアマガエル連想して、それでこっちサトウの象を連想して9-6」「色からアマガエル連想して、それでこっちサトウの象を連想して9-7」「色使いが明るかったもので……最初に明るいもの連想したんですけど10-1」「花の断面図……緑のやつオシメシベ10-2」
18.	pure F	比	11 : 7, 1 : 0.5
		1回目	1-1, 1-2, 1-3, 1-4, 1-5, 2-3, 3-2, 5-1, 5-2, 7-3, 8-2
		2回目	1-1, 5-1, 5-3, 6-4, 7-3, 8-1, 9-1

表4. プロトコール(No. 1)

1回目		2回目	
I ① 4"	<p>△蛾。[これ、羽根で、目(d5)で、胴体、尻尾のほう(D5)] W (Wm) F± A P</p>	I ① 10"	<p>△うーん、コウモリに見えるし、コウモリだとしたら、羽根と、胴体と、目(d5)で、触覚(d3)。[これ翼ですよ。こう手(身振り)、これが羽根、胴体、尻尾(D5)で、このへん目というか] W (Wm) F± A P</p>
②	<p>△蜘蛛にも見えます。……チョウチョでないから、蛾か蜘蛛かいわゆる昆虫の類。[これ(D1)身体、頭(D1-D4)。このへん(D4)が身体なのかな。このへん(D2)足っていうか] W (Wm) F- A</p>	②	<p>△あと、ハロウィンのカボチャというか、悪魔?ハロウィンのカボチャが何かこうハロウィンのカボチャに悪魔がとりついたというか、目、牙(下部S×2)。悪魔そのものでもいいんですけど。[こうあって(外輪郭線をなぞる)、切り抜いて(S×4)、目(上部S×2)で、鼻(中央S)で、口(下部S)。(悪魔?)目つきとか口の開け方が。目が釣りあがってるし。人相的にあまり好ましくない。敵意剥き出しというか、色が黒いもあるけど、牙こそないけど、口が裂けている] W (Wm), S M± FC' (Hd)</p>
③	<p>△あと悪魔にも見えます。[顔があって、目(上部S)に、口(下部S)] W (Wm), S F± (Hd)</p>	③	<p>△あと何見えるかな。何か得体の知れない化け物みたいのが、お互いに向かい合ってる。[これとこれ(D2×2)ですね。最初はコウモリ一匹だけで、分けて考えたらわからん化け物が。顔(d1)、翼(d4)、手(D1とD2の接触部分)、同じのが向かい合ってる。これ(D1)が何か、柱でも何でもいいけど、つかまって向かい合ってるような] W (W++) M± (H) Arch</p>
④	<p>△コウモリにも見えます。こんなにいくつも見えていいんですか? [胴体(D1)と、羽根(D2)。単純に] W (Wm) F± A P</p>	④	<p>△汚い蛾(笑う)。汚い蛾というよりも、何だろう、何か蛾なんですけど、汚いボロボロって感じのほうが強いかな。何か死にかけてる。息もたえだえの蛾。そんなとこかな。[蛾だとしたら、胴体(D1)、羽根(D2)、ボロボロだから汚い。(?)墨の濃淡の感じが薄汚い感じがするので。(死にかけてる?)ボロボロだから] 3'00" W (Wm) M± Fc A P</p>
⑤	<p>△あと、ふっと骨盤にも見えるし。……そんなところですよ。[これそのものが骨盤のイメージだったんですけど] W (Wm) F± Atb</p>		
1'30"			
II ① 1'30"	<p>△何も……これ形で表さなきゃならないですか?……(笑う)……わからない。何かに見えなきゃ。……動物が手を合わせてる。頭で。[これ(d1)手で、頭(D3)で、身体(D1)] W (W+) FM± A P</p>	II ① 3"	<p>△これ、一番最初(一回目のこと)に見たとき、向かい合ってる人って見えたけど、今もそう見える。ただ普通の人じゃなくて、すごく苦しそうな顔してる。人というより、生き物は生き物なんですけど、やっぱ得体の知れない不気味な生き物(ため息)。内臓というか、身体の一部がはみ出てる。このへん(D2)が感じたんですけど。うーん、死にかけて二人が、やっとこすっとこ支えあっているって見えなくもないです。顔の表情はひどく苦しそう。もしかししたら、これ(d1)手に見えるんですけど、手と手を合わせることで相手の体液を吸い取って、自分だけ生き延びようとしているように。いずれにしても苦しそうです。[これ(D3)顔、手で、何かマントか何か着てる(身振り)。フードついて(外側突起部分)、よく黒魔術やるときに使うような。顔が苦しそう。目や口や。手を合わせているように見えるんですけど(身振り)、しゃがんで、こう手を合わせているような。さっきはしゃがんでいるようには見えなかったんですけど、いずれにせよ、血(D1)の赤色部分複数)とか内臓(D2)とか、はみ出している。顔にしたって血だらけになってる。血しぶき(D2下部突起部分)。破裂した瞬間の血。(体液を吸い取って?)手を合わせてるところから、お互いに。二体あって出血多量なんで、何とかどっちかだけでも生き残ろうとしているっていうか] W (FaC) M-+ mF, CF (H), Bl, Ats, Cloth (P)</p>
②	<p>△最初にイメージとして出たのは、血だったんですけど。[赤いもの(D2+D3)の印象が血だったんです。特にこの部分(D2)] Dr (Da) C Bl</p>		

表 4. プロトコール(No. 2)

1 回目		2 回目	
II③ 2'20"	<p>△(付加反応)[ここの部分(D1+D1)だけだったら、膀胱とか内臓。全体じゃないですけど。] D (D-) F- Ats</p>	II② 5'40"	<p>△あとは、このへん(D2)は顔として、血を流しながら、怪我して、頭から血を流しながらうごめいている獣。向かい合ってるっていうか、やっぱりこれも死にかけているっていうか、苦しそうっていうか。熊だとしたら、一緒に死んでいくという感じですね。怪我か何かして苦しんでいるのが、向かい合ってるっていうか、熊か何だかアザラシか何だか、そういう動物。このへん(D2)が完全に血っていうか、頭から血を出してて(輪郭線をなぞる)、身体にも血がついてて(d1の赤色部分複数)、さっきの人もそうだけど、赤は血に見えます。[熊だとしたら、頭、足(D1下部突起部分)で、後ろ足(d1)。こう(√)見たんだと思う。熊みたい。逆立ちして(身振り)。逆立ち?)ここ前足で、こう後ろ足ですから、逆立ちして向かい合ってる。これ(d1)尻尾でも足でもいいんですけど。(頭から血?)これ。で、身体にも血がついてる] D (FaC) FM-+ mF, CF A Bl</p>
III① 4"	<p>△これ向かい合った動物が二匹。そうですね。火か何か(D5)を囲んで、人ではないかもしれないけど、動物かな。二匹。[頭、身体、手。同じ、対称、向かい合ってる。これ(D1)火のイメージだったんです。(雄?雌?)最初は雄かなと思ったんですけど、ここ(胸部分)見たら雌かなと。でもここ(ペニス部分)あるから雄かな。でもイメージからいえば雄です] W(W+)F± CF, A, Fire, P</p>	III① 3"	<p>△あー、幽霊。人魂。うーん、何か挟り取られた内臓っていうか、ズタズタになった心っていうか、そういう幽霊が二体向かい合ってるような。[これ(D1)人魂、これ(D2×2)幽霊。顔、手、足、胴体。(内臓?)多分このことだと思うんですよ(D3中央)。本来だったら身体の中に入るべき内臓が飛び出してる。そんな風を感じたんだと思います] W (FaC) Fsym-+ (H), Ats, Abst (P)</p>
② 1'10"	<p>△このへんで、臓器、臓物。このへんしか見てないんですけど。[このへん臓器。この二つの丸いものが(D7×2)] D (Dm) F-+ Ath</p>	② ③ 3'35"	<p>② △で、あと、蜘蛛?これが目で、口。蜘蛛に牙あったかどうか分からないけど、牙むき出して、飛びかかってこようとしている蜘蛛。毒があって、殺傷能力のある蜘蛛。これ手で、いまにもつかみかかろうとしていて、凄んでいるっていうか。蜘蛛だとしたら、怨念っていうか、幽霊だったら火の玉だけど、蜘蛛だったら、これ(D1)執念、恨みつらみ(笑う)。[目(D7)、手(D4)、この口(D5-D7)、牙。あるかどうか分からないけど、牙。毒蜘蛛っていうか、タランチュラっていうか、人畜無害ではなくて。牙むきだして、いまにも飛びかかってきそう。(怨念?)このへんだと思います。蜘蛛の形相が凄まじいので、怨念が漂っているっていうか] D (FaC) FM±, mF, Fsym Ad Abst</p> <p>③ △うーん、頭をかち割られたカニ。これ爪、顔の部分で、甲羅の中。脳ミソをえぐられて。熊は凄んでるし、カニは苦しそうですね。[これ(d2)爪なんです。顔(D5)。ここ(S)甲羅になるんですよ。やっぱりこれ(D3)血とか、脳ミソになるけど脳ミソをかち割られてる。甲羅をかち割られてる] D (D-) ,S F-, CF Ad</p>
IV① 15"	<p>△つぶされた熊(笑う)。[頭ベチャッと潰されて(d1)、手、足。つぶされた狸でもいいんだけど、アライグマでもいい] W (Wm) F± A</p>	IV① 5"	<p>△これは前と同じイメージですね。押しつぶされた熊っていうか、トラックにひかれたっていうか、熊の敷物みたいにベターッと(身振り)潰された熊。ベタンコになってて(身振り)。本当にあの、ダンプとかトレーラーとかに潰された、ベタッとなっちゃった熊っていうか、うーん。熊なら、頭で、手で、足なんですけど。[頭で(d1)、手で(d2)、足で(D3)、ローラーか何かで潰された(身振り)。ベタンコになってる(身振り)。インテリアでありますよね。ああいうイメージです] W (Wm) F± Aobj P"</p>
②	<p>△それから、潰された動物かな。こっちは頭。熊。こっちは頭で、また潰された動物って感じします。[ここ(D1)顔で、潰されてる。わけの分からない動物。目で、角で、手かなと思った(D3)] W (Wm) F± A</p>		



表 4. プロトコール(No. 3)

1 回目		2 回目	
IV③ 1'15"	<p>△化け物。[この顔 (D 1) 自体がひどく……妖怪というか、目があって、鼻があって、睨まれているような感じが]</p> <p>D (Dm) F-+ (Hd)</p>	IV② 4'00"	<p>△あと、このへんが顔に見えるんですけど、何だろう、牛みたいですけど、牛みたいな化け物かな。ぜんぶ化け物にしか見えない。……これも……何か潰されているような感じがします。潰されてて、息もたえだえになってる牛みたいな生き物。顔で、手っていうか、何とか進もうとするんですけど、まったく動けないというか。牛だとしたら、目はすごく悲しそうです。一生懸命前に進もうとしてるけど、死にそうなので進めないというか、多分泣きたいけど泣けないんじゃないかな。[最初こっち頭だったけど、ここ (D 1) を注目したら目に見えるんです。耳というか、角というか、牛に牙ないけど、何か牙にも見えるし、といっても、目が何か悲しそうな、いまにも泣き出しそうな表情に見えるんですけど、牛とは一概に言い切れないけど。(潰されてる?) 同じです。全然立体感がないんです (悲しそうに訴えかけるように)。こっち (Ⅲ図版のこと) は縦、横、高さ、あるけど、これは二次元、ノッペラボウ、平面]</p> <p>W (Wm) FM± (A)</p>
V① 6"	<p>△これは昆虫。チョウチョ類。でもチョウチョほど綺麗じゃないです。さっきの蛾とは違うけど、羽根あるから飛ぶもの。[色がついてないから、触角、足と羽根?]</p> <p>W (Wm) F± A P</p>	V① 4"	<p>△うーん、一瞬思ったのは、クリオネですね。でも、クリオネのような可愛らしさはないですね。[瞬間的に、オホーツクに行ったとき、こんな感じだった。本当はこんな感じじゃないけど (身振り、両手をパタパタさせる)。こんな触覚あって、こんな胴体で]</p> <p>W (Wm) F± A</p>
② 1'25"	<p>② △手にこう (身振り) 羽根をつけたウサギ。無茶苦茶なことってるな (笑う)。[耳と、顔と、足とで、これ (D 1) が邪魔くさいから、羽根が出ちゃったんですけど]</p> <p>W (W++) F± (A)</p>	② ③ ④ 4'50"	<p>② △何かやっぱりコウモリのような、翼を広げたコウモリというか。コウモリ。[翼、足、耳、顔、胴体。コウモリが翼を広げているところ (身振り)]</p> <p>W (Wm) FM± A P</p> <p>③ △死に損ないのチョウチョ (笑う)。触覚と羽根と、まあコウモリに似てるけど。チョウだとしたら、もう羽根ボロボロですね。うす汚いし。[ (死に損ない?) チョウだとしたら、翼、羽根がボロボロだから (外輪郭線)]</p> <p>W (Wm) F± A P</p> <p>④ △あと、翼を持った嘘つきのウサギ。ウサギには翼はないはずなんですけどね、何かウサギだとしたら、立ち上がって、前足が翼になってるんでしょうけど、うーん、翼で羽ばたきたいんだけど、逆に何か翼に違和感を持つてるし、翼が重たくて、空を飛びたいけど飛べないウサギ。空を飛びたくて神様につけてもらったけど、結局は飛べなくて、途方にくれているウサギ。ウサギだとしたら、欲しくて欲しくて仕方なかった翼を、神様に一生懸命お願いしてつけてもらったけど、嘘までついてつけてもらったけど…… (前段の繰り返し。記録し切れなかった) ……そんなとこです。[そこまでいくと、自分でも自信ない。耳、顔、目あって、ほっぺた膨らんでる (身振り)。足で、うまく説明できないけど。(立ち上がってる?) 足、立ち上がってる。手、両方の翼広げて (身振り) 立ってる。ウサギっていつかつたからウサギなんです]</p> <p>W (FaC) FM± Fc? (A)</p>
VI① 45"	<p>△何?……困っちゃうな……無理やり言うんだったら、引き伸ばされた、轆き潰されたアザラシ。[頭あって (D 1)、ベチャッとローラーで轆かれたような。これ (D 5) がアザラシの髭って感じしたんで]</p> <p>W (Wm) F± A</p>	VI① 8"	<p>▽こういうのって、こう (▽) 見てもいいですか? どう見てもいいですか? これも動物になった獣。やっぱりノッペリしちゃって。顔 (D 1)、手、足。[やっぱりさっきの熊と一緒に。ベタッと潰された。狐なんだか、狼なんだか、わかりませんけど]</p> <p>W (Wm) F± Aobj P</p>

表4. プロトコール(No. 4)

1 回目		2 回目	
VI② 1'28"	<p>△あと潰されたカブトムシみたいな感じもします。[やっぱりベチャッとなってるんで、潰されているんですけど。カブトムシのお尻のほう (d 3) っていうか]</p> <p>W (Wm) F± A</p>	VI②	<p>▽うーん、さっき一瞬こう (▽) 見たときに、花に見えたんですよね。花だけど、花の断面図?あの、ユリとか、チューリップとか、そういう花を真っ二つにスライスしたような(身振り)。花卉、花卉とメシベ、オシベ。カトレアでもいいけど、真っ二つにした断面図に見えます。[逆さ (▽) にしませんでした? 花卉あってオシベ、メシベあって、それをスバッと切ったように(身振り)感じたので。(?) 花卉 (D 3), 茎 (D 2), オシベ (内部微小S×2), メシベ (内部黒色領域), 葉っぱ (D 1)。(?) このへんです。オシベ、メシベ]</p> <p>W (Wm) F-+ Pl.f</p>
		③	<p>▽あところ (▽) すると、背中合わせになった狸。狸というか、アライグマというか、あのだぐい。背中合わせで、ピタッとくっついてる(身振り)。[奴は逆さまに見た。一体、二体で (D 3), このへんの模様 (d 1) がシマシマに見えたので、アライグマとか。頭、顔、手 (d 1), 足 (d 4), 尻尾 (D 1), 胴体。割とこっけいな感じで、背中合わせになってるなど]</p> <p>W (W++) Fc± A</p>
		④	<p>△で、もと (△) に戻したら、女性器にも見えますね。そんなとこだと思います。[これはもとに戻した形で…… (?) ……説明しにくい。女性器そのまんま。具体的に…… (?) ここ(中央線) が膣のように、このへん (D 3) がいわゆる外陰唇。多分これ (内部微小S) が、これがクリトリス。もしこっちがクリトリスだとこっち (内部微小S) が尿道?だと思えます]</p> <p>D (W-) F-+ Sex</p>
		⑤	<p>&lt;あっ、何かこう (&lt;) すると、陸地。こっち水面で。あっ、有珠山どうにかしてる。火口が二つあって、こっち洞爺湖。洞爺湖に映ってる有珠山ですか。噴火してる。火山の影が、湖面に逆さに映ってる (中央線両側の濃黒色領域をなぞる)。以上です。[縦にしたんですね。これ噴火で、ちょうど火口が二つある。第一火口 (D 3), 第二火口 (D 1)。カリフラワー状のモクモクと(身振り)噴煙が上がってる状態。ここの湖面です。洞爺湖に映った噴煙ということになりますね。突然シュールになってしまった。あっ、リアルですか]</p> <p>4'15"</p> <p>W (W++) mF, KF, FK Expl, Lds</p>
VII① 5"	<p>△イメージでいいんですよね?ウサギが向かい合ってる。二匹。[耳、顔で、手なんです。身体をねじって、顔だけ向き合ってる(身振り)]</p> <p>D (D+) FM± A P</p>	VII① 5"	<p>△えーと、あの、身体をねじ曲げて向かい合ってるウサギ(身振り)。首を振り向いて、うまく言えないけど(身振り)。耳で、顔で、お互いに向き合ってるウサギ(身振り)。[これ耳に見えたんです。顔で、耳で、上半身、下半身、尻尾 (d 1) がくっついてると。身体ねじってる。首ねじってる(身振り)。ねじるととも、振り向いてるとも言えるし]</p> <p>W (W+) FM± A P</p>
	②	②	<p>△ウサギに見えるし、女の子にも見えますね。女の子だとしたら、ポニーテール、何で飛び上がってるのか知らないけど、女の子だとしたら、エッと振り向いた(身振り)。手は前にほうに差し出してるけど、首だけ振り向いてる。女の子だとしたら、鏡に向かって、一枚鏡あって、それに自分自身を映してる。うーん、何かびっくりしてるみたいです。女の子だとしたら、だから髪の毛が逆立ってる。上がっちゃってる。[これを耳と見るか、髪と見るか……同じ。鼻、手、腰、胴体。(鏡?) 鏡か何か映してるというか]</p> <p>W (W+) M±, Fm H P</p>
	③	③	<p>▽世界地図。このへんアメリカ大陸と、カナダとか、ロシアとか、アフリカとか、単純に。[それはきつと逆さにして言ったと思う。このへんカナダ (右D 3), アメリカ (右D 2)。このへんアフリカ (左D 1)。ここロシア (左のD 4 + D 5)]</p> <p>1'25"</p> <p>D (Dm) F-+ Sex</p> <p>W (Wv) F-+ Map</p>

表4. プロトコール(No. 5)

1回目		2回目	
		VII④	○)∇こういう風にしたら(∇), カブトガニというか, ゲンゴロウとか, とっさに思ったんですけど, 何か乗っかっている。カブトガニでもゲンゴロウでもいいけど, 乗っかっている, 何か背負った甲殻類。もしくは, うーん, そんな感じだと思います。[このまま(∇)見た。このへん(S)甲羅。このへん(d2+D4)足で。(乗っかっている?)これが何か, 胴体の上になんか乗っかっている。白い空間が。これもベタッと潰されてる(身振り)。(?)この白い……それが背中に乗っかっているというか, へばりついてる。それで, ベタッとなっているように見えたんです(身振り)] 4'45" W (W-), S FM- A
VIII① 20"	∧……(ため息をついて図版を離して見る)……何か壁に登る熊が, 左右対称。対になっている。[これ(D1)が熊なんです。崖っていうか, 岩場を(D5+D6), 上に向かって登って行っているような感じしたんですけど] W (W+) FM± A P	VIII① 38"	∧いままでのよりは明るいイメージですけど, 何か特にこれといって浮かばないな。あー, 内臓。人間の。肺で, このへんが腎臓とかそのへんで。前のときには, これが熊に見えたんですけど, いまも見えないことはないですけど。[人体の内臓に見えた。人体模型図。胴体, ここだけ(身振り)ですね。理科の実験室にある。肺で(D7), 食道で(d2), あばら骨(D4)。このへん(D2)膀胱とか腎臓] Dr (DdD) F-+ Ats
②	∧あと胸部のレントゲン写真。ここまでであると骨盤も全部入っちゃうかな。腕もあるし。手と, 腕と, 腰, 骨盤まで全部。[このへん胸骨(D4), 腕(D1), 肺のあたり(D7)。内臓のあたり(D2)の写真] W (W+) F-+ X-ray	②	<こうすると(<)豹ですね。やっぱり水面か何かに映ってる岩を一生懸命つたってる?岩から落ちなきゃいいんですけどね。豹だとしたら, この先何もないですよ?だから岩をつたいながら, 前に進めない。かといって, 水の中に落ちちゃったら大変だし……でも豹と思えば, いやな感じはしないです。先に進む足場がなくなったから, どうしようかって思ってるけど, 意欲は強いんじゃないかな。[多分縦にしたと思う。前足, 後ろ足, 目, 耳, 鼻, このへん(D2+D6)が岩です。ここは水(下半分)。湖か川か。川だとしたら, 前に行こうとしてつたってる。でも前に岩がないから進めない。何で前に行きたいかは……水の上に反射して映ってると] W (W+) FM± A P
1'30"		③	∇逆さまにして花。やっぱりカトレアみたいな花ですね。花卉で, カトレアかもしれないけど, 食虫花かもしれない。[多分逆さまに。花卉(D2)。これも花卉(D1)。茎(d2を含む中央線)。このへん葉っぱ(D7)。垂れ下がった感じが(D1), アヤメとかカトレアとか, ああいう風に見えた。(食虫花?)一瞬綺麗な花に見えて, カトレアとかお答えしたんですけど, このへん(D4)見たときに, 綺麗だけじゃないぞ, みたいな。これがなかったらただの花だけど, ここに拘ってしまった。ここが空腹の胃袋というか, それで] Dr (W-D3) (DdD) FC± Pl.f P
IX① 6"	∧噴水。[これ(D5)が水で, こう噴水が吹き出ししているように見えたんですけど] D (Dv) mF na	IX① 1"	∧向かい合ってるドラゴン。顔ですね。ドラゴンっていうか, タツノオトシゴみたいな。というよりも, ドラゴンだな。[これ(D3)タツというか, タツノオトシゴというか, 顔。で, こんなのある。目で, 口で, お腹で, 背びれというか, 髭みたいな。どちらかというと最初ドラゴンだと思ったんですけど, 目, 口, 髭, そのへんで] D (Dm) F± A
②	∧ランプ……明かり。ランタン。キャンプやなんかのときに。いわゆるランプ。[これオイルタンク(D2), 芯(D5), 炎(D3+D3)。(炎?)これ。内炎(D1)と外炎(D3)っていうか。(明かりとランプは同じ?)同じ。明るい感じ] W (Wa) F±CF? mF? Obj Fire	②	∧あとランプ。炎。芯があって。[これ炎で(D3), 芯があって(D5), アルコールランプみたいなものですよ。で, 何ていうんですか, ポットっていうか(D1), ここ土台っていうか(D6)] W (Wa) F± CF?, mF?, obj Fire
55"		③	∇これは縦にしても何も出てこない。うーん……花のような……やっぱり向かい合ってるドラゴンかな……ランプだな。[逆さにしたと思います。花卉(D6), 茎(D5), 葉っぱ(D1), それだけ。このへん(D3)強いて言えば, 葉っぱ。枯れてますね。(枯れてる?)これ生きのいい葉っぱ(D1)。オレンジっぽいから枯れてるってイメージがあって] W (W++) FC± Pl.f

表4. プロトコール(No. 6)

1回目		2回目	
		IX④	<p>&gt;あー、湖に映った夕焼けと雲。[これも縦にしたと思う。ここが湖面(中央線)。境界線で。で、雲(D1)。多分そうですね。オレンジだから夕焼けと思ったのかな。ピンクだから夕焼けと思ったのかな。緑のが雲です。どっちだったかな。どっちだかはっきり覚えていません。このへん微妙なのが山(中央濃色部分)]</p> <p style="text-align: center;">W (Wa) C, KF, FK, Cl, Lds</p>
		⑤	<p>&gt;何か一瞬サンショウウオにも見ええした。[これ(D3×2)サンショウウオに見えちゃったんですね。これ(D1)がカエルです。(サンショウウオ?)ここ口で、胴体、尻尾です。こことりあえず足。(水?)こっちは陸にいる。自分の姿が水に映ってるのかもしれないけど。陸のは入ろうとして、下のは一匹のサンショウウオと仮定すると、陸に上がりたいような]</p> <p style="text-align: center;">D (Dm) FM± A</p>
		⑥	<p>&gt;これがカエル? [⑦参照、質疑もれ]</p> <p style="text-align: center;">D (Dm) FM±, FC A</p>
		⑦	<p>&gt;これ(D2)ちょっと分からないけど。……全然脈略ないけど、強いて言えば象かな。なんで象かわからないけど。サンショウウオとしてこれが水に入りたがってるし、こっちは水から出たがっている。何か曖昧だけど、そんな感じですね。カエルもやっぱり水に入ろうかどうしようか、下のは出ようかどうしようか。象はただ座ってるだけで、そんな感じはしないですけどね。[象?]こじつけです。色からアマガエル連想して、それでこっちサトウの象を連想して、これ耳、手、足で、座ってるんです。何かに見立てなきゃと思って]</p> <p style="text-align: center;">D (Dm) FC±, FM (A)</p>
		4'50"	
X① 15"	<p>① 八手をつないでいる二人の女の。[これ手(D5), 頭(D13), 身体(D6)。(女の?)線が華奢。色合い、ピンク。髪の毛長い]</p> <p style="text-align: center;">D (D+) M± FC H</p>	X① 5"	<p>① 八向かい合ってる妖精。ただちょっと気持ち悪いんだけど。大きな妖精の回りに小さな妖精が飛び回ってる。でもいまは着物きた女の幽霊にも見えますね。そうなるこのへんは化け物。女の……成仏しない女の人の霊。水子なんかがまわりついているような。女の人の霊だとすると、後ろ姿。髪の毛、どっかに行こうとして。扉があって(d2), その向こうに行きたがってる。出たがってる。○&lt;これはあんまり水に映ってる感じしませんね。[一瞬明るいと思って、それで二人いて、妖精(D6+D13)。色使いが明るかったもので。後ろ姿です。頭、胴体、手、何か持ってますね。何を持ってるかは分からない。これ扉か何かで、向かっているという。妖精だとしたら、これ小さな妖精(W-D14)。(幽霊?)最初に明るいもの連想したんですけど、何ていうのかな、このへん(D13)見たときに不気味な顔つきというか、そうすると妖精ではなくて、幽霊になっちゃうんですね。これ完全な和服。帯、頭、首。足がない。(?)足がないんですよ。幽霊にすると足もとにぶらさがってますよね。水子がこのへんとかたくさん。自分のことだと思う。水子がついていると言われるから。そこから発想したのだと思います]</p> <p style="text-align: center;">W (FaC) M-+, mF (H)</p>
	② 八妖精とそれを取り巻く霊的なもの。何か悪魔っていうか、黒い蜘蛛のような悪魔もいます。そんな感じですよ。[妖精(D6)。天使までいかないけど、そういうもの。そして、それを取り巻くもの(W-D14)。反対でもこれ(D13)が妖精。だったらこれ(D6)天使(質疑もれ)。(悪魔?)ここ(D13)の部分、悪魔が二匹。黒いところが。目、口、角] <p style="text-align: center;">W (W+) FC-+ (H)</p>	②	<p>√花の断面図。そんなところですよ。[多分逆さまにして。花卉、スパッと切ったような(身振り)。花卉(D6), ガク(D13), 茎(d2), メシベ, オシベ(D5)。(メシベ?)緑のやつ(D3)。オシベ, その他もろもろ。このへんのやつ(D14)の両外側)。(花らしいところは?)真二つにしたら(身振り), こんな風になるんじゃないかと]</p> <p style="text-align: center;">W (W+) FC-+ Pl.f</p>
		1'30"	
		2'45"	
<p>(1回目のみ施行) LIKE CARD: IX 明るい, 色がきれい, 優しい感じ。DISLIKE CARD: II 血が破裂した感じのイメージ。IIIもだから赤が好きじゃない。嫌なのいっぱい。IとIV。恐怖, 暗い感じ, おどろおどろしい, どれも不気味。SELF: I, IV, VI 醜悪, 不気味。(自分)もっとおどろおどろしい。親につぶされたという意味で。HUSBAND: IX 明るいし, 健全だし, 一般的な日常生活を営んでる普通の人間。十枚のなかで一番きれい。FATHER and MOTHER: 父と母は同じ。IIとIIIどっちでもいい。とにかく黒と赤という色使いで。SISTER: IV ひきつぶされているという, 親につぶされたという, アダルト・チルドレンだから。</p>			

ころ]、「～である」、「～ている」などがある。また、「死んでいる」、「消えている」は已然態である。

次に「3-2. 進行態」である。進行態とは、ある動作・作用がそれ以前から始まっており、そのときも継続中であり、さらにそれが後にまで持ち越されるべきことを表わす言い方で、それには「～ている」、「～つつある」、「～ているところ」などがある。

次に「3-3. 将然態」である。将然態とは、ある動作・作用がまだ起こらないが起こる前の状態にあるということを表わす言い方で、それには「～ようとしている」、「～ところだ」などがある。また、「死につつつある」、「死にかける・死にかかる（死ぬ寸前の状態に達する）」は将然態である。

最後に「3-4. 単純状態態」である。単純状態態とは、動作・作用や現象が起こるとか終わるとかいうことを考えずに、ある状態にあることを表わす言い方で、「～」、「～ている」という表現をとるものである。他のカテゴリー、たとえば「向かい合ってる」や「映っている」に分類される語の使用と重複したり、分類に際して已然態や進行態との判別に困難をきたしたりするため、今回は分析の対象とはしない。カテゴリー化の途上で捨て去られたものとして提示しておく。

第四のカテゴリーは、「4. 映る」である。いわゆる反射反応のことで、「映っている」「映している」などの表現がとられるものである。

第五のカテゴリーは、「5. 向かい合ってる」である。いわゆるペア反応のことである。「こっちも」「向かい合っている」「対になっている」などの表現がとられるものや、明言されずに指差しによって示唆されるものも含まれる。

第六のカテゴリーは、「6. 白図の等置」である。これは、空間として閉ざされていない空白領域を図として利用し、インクプロッ

トと等置するものである。

第七のカテゴリーは、「7. 地図」である。反応内容として、文字通りの地図が構成されるものである。

第八のカテゴリーは、「8. 断面図」である。反応内容として、文字通りの断面図が構成されるものである。ただし、断面図として明言されなくとも、論理的な必然としてそれであると判断されるものも含む。

第九のカテゴリーは、「9. レントゲン写真・模型図」である。これも反応内容として、文字通りのレントゲン写真や模型図が構成されるものである。

第十のカテゴリーは、「10. 身振りと自分の身体を利用した説明」である。反応を説明する際に身振りで示したり、自分の身体箇所を利用して説明するものである。

第十一のカテゴリーは、「11. 図版の回転」である。図版を手渡されてから第一反応を表出する間に、あるいは直前の反応との間に、図版の回転が介在している反応のことである。

第十二のカテゴリーは、「12. 擬音語・擬態語」である。米を「ザクザク」といっているや、大粒の涙を「ボロボロ」こぼす、のような、音を映した擬音語や、音のないもの音によって象徴的に表わす擬態語が用いられているもの。

第十三のカテゴリーは、「13. 瞬視」である。「あっ（感嘆詞）」「ふと（副詞）」「ぱっと見て」「一瞬」などの言葉によって、思い浮かんだり見えたりすることがまるで突然のことであるかのように表現されたり、あるいは「瞬間の」という表現によって反応自体が一瞬の場面であることが強調されているもの。

第十四のカテゴリーは、「14. 図版枠からの越境（ロールシャッハ状況を含めた図化）」である。これは、①インクプロットの形状について説明する際に、「くり抜いた」「～でつぶされた」「スパッと切った」「絵の具で書いた」など、被験者とインクプロットの「いま



ここ」における極めて具象的な関係を反映するもの、②反応に何らかの作用を及ぼす主体が、暗に、あるいはあからさまに想定されているものの、それが図版枠のうちには存在しないもの、③「人間が立っている」にもかかわらず下半身が図版のうちにはなく、それを図版枠の外部に想定しなければならないもの、④正面図としての反応で、「睨む」「睨まれる」「飛びかかってくる」といった表現の対象が、図版枠の外部にいるクライアント自身であるようなもの、⑤自分に関係付けて説明するもの、などである。

第十五のカテゴリーは、「15. 文脈への言及」である。反応との直接的な関連はないが、反応の地としてその文脈について付言するもの。

第十六のカテゴリーは、「16. ちゃった」である。これは、文字通り「～ちゃった」という表現が含まれる反応のことである。

第十七のカテゴリーは、「17. 色彩の関与・非関与が想定される反応」である。正規のコード化によって評定される色彩反応（無彩色を含む）に加えて、明言されていなくても色彩の関与が暗示される反応、あるいは色彩の関与が被験者の明白な言葉によって否定される反応である。

最後の第十八のカテゴリーは、「18. Pure F」である。決定因が形態のみに限定される反応のことである。ただし、正規の規定では決定因としてコード化されなくても、何らかの力動感などが付帯する場合、あるいは色彩などが関与していることが想定できる場合には、ここに含めない。

## V. 反応の解釈

### 1. 「1. 『主語・述語の揺らぎ』について

1回目には、主語の「1-1. あいまい」な表現や主語部分の「1-2. 主題の変転」が認められるが、述語部分の「1-3. 主題

の一変」は認められない。対照的に、2回目は、主語部分、述語部分ともに、大きく揺らぎが認められる。

まず主語部分の揺らぎに関して述べる。主語部分の規定がそのつどの自己の成立や自我境界の形成に関連しているとすれば、次のように判断することができる。つまり、1回目にはすでに自己の成立や自我境界の形成に困難をきたしていたのが、2回目にはそれらのはっきりと見て取れるくらいに重大なものになったということである。自我境界の脆弱性については、たとえば、1回目の「にらまれているような感じが4-3」、2回目の「飛びかかってこようとしている3-2」に、直接的に反映されている。さらに、「6. 白図の等置」に見られるように、2回目には非常に形態質のよくない反応があり、確固とした輪郭によって形態が閉ざされていないという意味で、自己の形成に関わる困難が1回目よりも重篤なものになっていることが見て取れる。

次に述語部分の揺らぎをゲシュタルト変換と関係づけて述べる。いま現在保持している注意を他に向け変えると、現在構造化されているゲシュタルトは他のものへと変化する。つまり、注意の変更は、何かが消滅して他のものが生成する、知覚野の再構造化なのだといえる。その意味で、知覚の再構造化というのは、ゲシュタルト変換なのである。

ここで説明している「1. 主語・述語の揺らぎ」というのは、知覚野の構造化-再構造化に関わることである。A子の場合には、主題の内容は変化せずにその相貌のみ変化するものから、その意味内容を根本的に変えてしまうもの、ひいては主題の同一性自体が失われてしまうようなものまでさまざまである。

2回目の反応の多くは、言語表現の流動性からいわゆる「作話反応」と呼ぶことができる。A子には解離性（ヒステリー性）の意識障害すなわち意識の「照明」の暗さは見られないが、その流動性の内実は、主語部分と



述語部分からなる主題が確定されないということ、多義的であるということが理解されるであろう。通常の反応であれば、例えば「女の子が踊っている」のように、判断のふたつの契機である主語部分と述語部分がひとつに確定されるはずであるが、ここでは着想を終結させることが困難になっているのである。

もちろん、すでに1回目の反応にも目まぐるしいゲシュタルト変換、概念的境界のルーズさ、それから概念規定のルーズさは認められる。たとえば、「2. 主題の転位」としてカテゴリー化したものである。1回目「反対でもこれが妖精。だったらこれ天使10-2」は、もうひとつの反応として独立させるべきだったかもしれないが、このような特徴がある。それから1回目の「火のイメージ3-1」は、質疑漏れになっているが、別の領域に着想した火という概念を、領域の規定に転位して使っている。

これまで述べてきたことを要約しよう。注意の焦点を確立して持続することなく、それが流動的に向け変えられる。そのため、目まぐるしいゲシュタルト変換すなわち再構造化が連続して、ゲシュタルトを固定化して定位することが困難である。理想的には、個々の反応毎にゲシュタルト変換が生起するはずであるが、主題の目まぐるしい変換によって、反応間ではない反応内において再構造化が連続しているのである。

目まぐるしいゲシュタルト変換と主題の多義性からは、そのつど身を置く状況を十分に体制化し得ないこと、空間の定位ないし分節化が不全であることが理解される。Goldstein, K. (1934) は「あらゆる変換と一義性の欠如とは、生体がまだ最適なる環境を発見しえないことの表現である」と叙述しているが、A子の場合には、主題としての図を図たらしめる安定性のある地、静止した地が欠如していて、腰を落ち着けるべき足場が非常に脆いことを意味しているのであろう。

このことは、もちろん「18. pureF」の減少とも関連づけることができるはずである。

## 2. 「3. 動の аспекト」について

1回目に皆無であり、2回目にはじめて現れた「3-3. 将然態」について検討する。A子の「3. 動の аспекト」のなかに、筋肉運動感覚に還元できそうな表現、それもⅢ図版P反応「二人で荷物を持ち上げている」のような理想的な人間運動反応とみなされる表現はない。将然態だけみると、運動に至る以前の単なる主観的な状態や願望にとどまるもの、たとえば「羽ばたきたい5-2」や、葛藤や迷いとして理解される「泣きたいけど泣けない4-2」や「入ろうかどうしようか9-7」などがある。A子の場合には、このようにインクプロットに根拠づけすることのできない、主観的な投影を思わせるような反応が少なくない。ということは、これは知覚というよりも、むしろ思考や表象に関わることである。

理想的な人間運動反応、成熟型のMの特徴といえるが、Rorschach, H. (1921) は、体験型について述べるなかで、M型の人が「不器用」であると言だけ触れている。彼の理論はその点でWallon, H. (1942) の理論に類似しているのだが、運動表象が発生するのはPiaget, J. (1936) が言うように感覚運動的シュームが内面に取り込まれるからではなくて、身体運動をみずから筋肉的なレベルで抑止する塑型の活動によって発生すると考えているわけである。したがって、あまりにその抑制が強ければ動作もぎこちなくなって、結果として不器用になるのだと推測される。

A子は元来活動的な女性だった。しかし、心身の不調によって、健康な頃のような自発的な行動が不随意的に抑止されるようになった。A子の場合には、1回目にも理想的な人間運動反応がないので、みずから随意的に身体運動を抑止して、現実に即した、あるいは

はインクプロットに根拠づけられた運動を表象するようなパーソナリティのタイプではないのだが、M型の随意的な抑制とは異質であるものの、結果として2回目の時点では不随意的な抑制を余儀なくされていると考えられる。したがって、2回目に「作話」があったり、従来のコード化からはもれてしまうような「動の aspekt」が溢れていたり、運動に至る以前の「将然態」が出現したりするのは、このような不随意的な抑制によるものと考えられる。

ところが、不随意的な抑止といっても、すでに述べたように安定した地を欠いているので、活動性は以前と比べると落ちるものの、腰の落ち着きのなさ、つまり刺激拘束性と不可分の衝動性は、あいかわらず彼女のスタイルとして残存しているように思われる。この点については、A子の「11. 図版の回転」と「10. 身振りと自分の身体を利用した説明」に読み取ることができるであろう。

図版の回転は1回目にはまったくなく、2回目のVI図版の自由反応段階になってはじめて現れる。そこではじめて「こういうのって反対に見てもいいですか?どう見てもいいですか?」とテスターにたずねている。それから図版を頻繁に回転させ、同時に身振りによる説明も自由反応段階で活発になる。

多彩色のVIII図版からは、図版の回転は若干少なくなる程度だが、身振りによる説明は激減している。そのかわり、II図版とIII図版の有彩色図版がそうであったように作話的な反応があったり、IX図版では反応数が増えたりすることによって、表象レベルの活動が活発になっている。

### 3. 「14. 図版枠からの越境」と「15. 文脈への言及」について

まず、反応の形成過程について、図と地の分節という視点から考えてみる。ロールシャッハ・テストは、まず査定者の「何に見えるか」

という先取りの枠づけによって始まる。その問いによって、被験者は、図版を介在させて対峙する自分、査定者、それからあいだの空間から構成されているロールシャッハ状況から、図版を主題として切り出し、それを図化して査定者に提示しなければならない。つまり、互いの身体によって織り込まれた状況あるいは自己身体そのものを地として潜在化させて、その上に図版のみを図として出現させることを求められるのである。

この原初的な段階で構成されるゲシュタルトは、したがって、枠としての図版の紙枠を超えたメタレベル(あいだの空間)が地となり、その地を直接の地盤として図版という一全体が図の位置を占めて現出したものと考えられる。反応としては、たとえば「インクで書いた、ただの絵」とか「パレットの絵の具」というのがそれである。ここでは、インクプロットだけでなくそれを包囲するS領域を含めて、図版の紙面全体が図化されたゲシュタルトが構成されることになる。

次の段階では、インクプロットを包囲するS領域が白地として潜在化し、その地を直接の地盤として、その上にプロットだけが図化されて出現する。したがって、S領域である白地とインクプロットである黒図との境界域に形成される外輪郭線によって、自己完結的に閉合した形の体験が構成されることになる。ここで構造化されるゲシュタルトは、白地の上のインクプロットということになるし、さらに進展すれば「ここが手で、足で」というかたちで内部構造がさらに分節化することになるので、前の段階の反応よりも、反応自体が厚みを帯びて知覚されると考えられる。

ここまでは、フィールドからインクプロットへ、つまり下から上へ、という方向で述べてきたが、次に、インクプロットからフィールドへという方向で述べる。

通常であれば図と地の二つで理解するところであるが、哲学者の Gurwitsch, A. (1929)

のように、「主題 (theme)」「主題野 (thematic field)」「辺境野 (marginal field)」の三つで知覚野を理解する。

Ⅲ図版 P 反応の「人が荷物を持ち上げている」という反応で説明する。インクプロットを人として見ているわけだが、この場合それが「主題」ということになる。主題としてのインクプロットは、現在見えているアスペクトのほかにも、別の反応として他のアスペクトがひらめく可能性がある。そして、その周囲を包囲している白色領域が「主題野」として地を構成している。さらに、これら主題と主題野に属さないものが、すべて「辺境野」に属するとみなされる。

以上のことからこのⅢ図版 P 反応の構造を理解すると、次のようになる。つまり、人の領域にあたるインクプロット部分が主題、白色領域と反応に取り込まれない赤色領域が主題野、図版枠の外部とみなされるあいだの空間やフィールドが辺境野ということである。通常の反応であれば、この主題=インクプロット、主題野=白色領域、辺境野=フィールド、という知覚野の構造が保持されている。加えて、主題野と辺境野は地として潜在化したままにとどまり、それが極端なかたちで顕在化することはない。

ここからは反応の具体的な説明になる。事例の A 子には、このような主題、主題野、辺境野という通常の三つの三層構造に従わない反応がある。

まず、1回目にも2回目にも1個ずつあるが、「にらまれているような感じがする 4-1」と「とびかかってこようとしてる 3-2」である。通常の反応の構造では地として潜在化しているはずであるが、ここでは、図版の外部にいる A 子自身が図として顕在化している。先に自我境界の問題として説明したが、反応を自分の身体に関係づけているわけである。さらに、1回目にはなくて2回目にひとつだけ認められる反応だが、2回目の10-2

「自分のことだと思います。水子がついているといわれるから」という表現は、いまこの身体を超えた自分自身の歴史性にまで関連づけられている。

次に、1回目にも2回目にもあるが、「切り抜く」「抉り取る」「つぶされる」「スパッと切る」という表現である。これらを理解するには、Schachtel, E. (1966) の「モーター・レスポンス (motor response)」を想起されたい。たとえば「真ん中で切り裂きたい図版です」という、通常のコード化では拾えない表現である。これは、インクプロットに知覚された形を、自分の身体との関連で具体的に操作しようとするものである。

A 子の表現は反応の主題を規定する文脈、つまり主題野あるいは地について説明したものであるが、やはりそれは通常は潜在化したままにとどまっていて、表現されないはずである。加えて、A 子の場合には、Schachtel のモーター・レスポンスのように、主題と反応主体との関係が具体的なレベルで語られている。つまり、インクプロットのここを切り抜いて、ここをローラーでつぶして、図版の表面をスパッと切って、ということである。もちろん、「つぶされている」という表現は、Ⅳ図版とⅥ図版に出現しやすいので、それについてはある程度割り引いて考える必要がある。

それから、このような身体的な関連ではなくて、あくまで思考のレベルで、主題のおかれている文脈について説明したものが、「15. 文脈への言及」で取り上げた表現である。つまり「スーパーに並んでる」とか「インテリアでありますよね」といった、さりげない説明のことである。この「文脈への言及」は、1回目にも2回目にも認められるもので、いわゆる作話のような極端なものではない。

しかしながら、「14. 図版枠からの越境」に分類した2回目「空を飛びたくて神様に付けてもらった翼 5-4」という表現は、文脈

を規定する表現であるにせよ、極端に主観的で、インクプロットに根拠づけることが不可能であるから、いわゆる作話として理解することができるであろう。

以上を要約する。知覚野の三層構造はすでに1回目の時点で問題を抱えているが、2回目にはさらにそれが進展して、潜在化しているはずの思考による文脈規定が、現実根拠づけられない作話となって顕在化するに至っている。

#### 4. 「6. 白図の等置」「7. 地図」「8. 断面図」「9. レントゲン写真・模型図」「12. 擬音語・擬態語」「13. 瞬視」について

A子の反応を見ると、厚みのない、面的な反応があふれている。IV図版とVI図版の「つぶされている」は1回目にも2回目にも共通しているが、その質を見ると2回目の方が面的であることが強調されている。

2回目において1回目にない面的な反応を順に解説する。まず、2回目「世界地図7-3」である。認知心理学の視点(天ヶ瀬, 1994)から言えば、地上で環境の配置を見渡すと、「遠近法情報」が抽出される。それから、環境の配置を上空から見ると、「地図情報」が抽出される。ロールシャッハでも、「上から見た」と表現されるときには「地図情報」が抽出される。これはいわゆる「鳥瞰図」のことでもある。林部(1995)は「一般的には、水平視差から垂直視差に移行するに伴い、立体効果は減弱し、完全な垂直視差では立体は出現しない」と述べている。そのため、左右対称な鳥瞰図は押しつぶされたもののように見えやすく、立体性が平面的なものに引き伸ばされてしまう傾向があるのである。このようなことから「地図」という反応は、紛れもなく平面的なものである。

次に、「6. 白図の等置」に分類した二つの反応について説明する。2回目「甲羅の中

3-3」, 「何か背負った甲殻類7-4」という反応も、A子は述べていないが鳥瞰図である。この二つの反応は外輪郭線が閉合しておらず、それを辿ると内側がすなわち外側であるかのようなメビウスの帯現象が見られることが共通している。異なるのは、III図版のS領域が「かち割られた」欠損部分すなわち「ない」とされている一方で、VII図版のS領域が「背中に乗っかっている」有体部分すなわち「ある」とされていることである。

知覚野の三層構造も、ここでは変容している。この反応では、あいだの空間を直接の地として、図版という一全体が図の位置を占めて出現している。通常の三層構造のように、白地の上に黒図が分節化して白色領域が潜在化するのではなく、白色領域がインクプロットと同等の位置を占めて、相互に接続された黒図と白図へと二重構造的に分節化しているわけである。これを「同位化の機制」と名づける。このような同位化の機制は、反転図形である「ルピンの盃」に対するA子の回答にも認められた。その「顔にもカップにもどっちにも見えます」という回答と、この反応は、構造的に同一視し得るであろう。

さらに、A子の「複視」も、この同位化の機制によって理解されるかもしれない。遠くの物を見ると近くの物が二重に見えるという現象は、われわれが単眼ではなしに複眼で物を見る際には自然なことである。しかし、意識を集中して知覚野の中心に置かれた物を図として見ているときには、その手前にある物の二重性は周辺の出来事として意識の周縁に後退し、地になる。したがって、われわれの平凡な日常的意識は、複視にもかかわらずそれに頓着しない自明性のもとに休まっているのであり、地化された(潜在的)複視に対しては無頓着な態度が維持されているのである。ロールシャッハ・テストに見られたA子の図と地の同位的な等置から理解すれば、彼女の複視は、通常であれば意識の周縁に地

化されるはずの二重性が、焦点化された図と渾然一体になって知覚される現象として把握されるであろう。つまり、意識は清明であるにもかかわらず、地化されない二重性が、図と同様のインパクトをもって意識にのぼり、それらが同位的に等置されることによって、知覚野全体が漠然と意識されているのである。心理学の視点からいうと、いわゆる自明性の喪失のひとつの側面は、このように理解できるのかもしれない。

では、面的な反応の検討に戻る。次は「12. 擬音語・擬態語」についてである。「ボロボロ（ズズズ）」「ベターッと（ベチャッと）」「スパッと」という、三つの表現に注目する。

「ボロボロ（ズズズ）」という表現は、1回目には皆無で、2回目に陰影に対してと、それから輪郭線に対して反応されている。型通りに解釈すれば、これは Rapaport, D., et al. (1946) の「自慰・去勢表現」や Exner, J.E. (2000) の「MOR」に相当するので、自己毀損感を反映しているのかもしれない。知覚に即して言えば、濃淡（濃い、薄い）の方は黒色のコントラストが目につくということがいえるし、輪郭線の方は白色領域とインクプロットのコントラストが目につくことができるであろう。

次に「ベターッと」である。IV図版とVI図版はつぶされたものに見えやすいが、1回目よりも2回目のほうがつぶされていることの表現が顕著になっている。「べったり」という表現は、一面にしっかりと貼りついていることや、高低、起伏がなくて、平べったい様子を表わす。「ベチャ」というのは、それに加えて、水分を多く含んでいる様子を表わす。やはり、このあたりにも反応に厚みのないことが現れているといえる。

最後に「スパッと」である。切れ味のよい刃物で、一気に断ち切る様子が表現されている。「8. 断面図」に分類した二つの反応がこれである。スパッとどこを切っているのかと

いうと、それは図版の表面である。ロールシャッハ図版は通常の絵画、絵とは異なっていて、コラージュ作品のように白い地の上にインクプロットが浮き立って見える。Gibson, J.J. (1979) の言葉で言えば、コーティングされた表面を持つ図版それ自体が「リアル・オブジェクト」、たとえばコーモリとして知覚されるインクプロットが「ヴァーチャル・オブジェクト」ということになるが、スパッと切ることで、図としてのヴァーチャル・オブジェクトと、地としてのリアル・オブジェクトのあいだに成立するヴァーチャルな厚みないし奥行を、極限まで切り取ろうとしているわけである。したがって、スパッと切るという表現も、厚みのない面的な特徴を表現したものであると考えられる。

次に、「9. レントゲン写真・模型図」である。1回目「レントゲン写真8-2」、2回目「人体模型図8-1」である。ここでも、コラージュと絵画の違いを想起されたい。コラージュは地の上の図という構造によって成り立つが、通常の絵画はキャンバスの上に絵の具を塗りつけるものの、描かれた対象はあくまでキャンバスという面の奥に見えるはずである。コラージュだと何も貼られていない空白領域があいだの空間ということになるが、絵画だと、たいがいキャンバスの全面すべてに絵の具が塗られていて、空白領域はない。そのかわり、あいだの空間は絵のなかに描かれていない大気ないし空気の領域に生まれるわけで、したがって、キャンバスの面、あいだの空間、描かれた対象という奥行構造をなして知覚されるはずである。写真も、このような絵画と同様の構造をなして知覚されるはずである。

A子の場合「レントゲン写真」「人体模型図」と表現しているが、これはいま述べたような、いわゆる「絵」として見ていることを表現しているように思われる。ロールシャッハ図版を見て「絵」と表現することは、いま



説明したことから類推すると、インクプロット領域だけでなく、白色領域も反応に暗に含めていることが理解される。通常の反応の構造では潜在化しているはずの白色領域が、やはり顕在化しようとしているわけである。このような反応は、先に「6. 白図の等置」で説明した同位化の機制に接近するものと考えられる。したがって、主題-主題野-辺境野という通常の三層構造からなる反応と比較すると、厚みを欠いていることが理解されるのである。

厚みを欠いた知覚野の面性は、地の上の図というかたちで厚みを帯びて浮かび上がるはずの意味が、浮かび上がりにくいということであるから、面的であるということは、意味喪失というA子の離人症の一症状とも、自明性の喪失を示唆するものとしても考えることができる。しかし、この症状がなくても反応が面的な事例は数多いので、反応に厚みがないことと離人症や自明性の喪失を直接的に結びつけることには慎重でありたい。むしろ、たとえば2回目の10-2はExner, J.E. (2000)のFD反応であり、インクプロットに面と面の重なりとしての奥行を見て取ることができるわけであるから、周囲の世界は平板化しても、奥行を見て取るための内的構えそのものが完全に失われているわけではないことが理解されるであろう。

それから、反応が面的であるということは、時間の観点から言い換えると、瞬間的な知覚であるといえるかもしれない。A子が生きているのは、持続する厚みのある世界ではなくて、そのつど時々刻々と変化する瞬間的な世界なのかもしれない。「13. 瞬視」に分類したが、A子には直観的な表現が少なくない。パッと思いついて、パッと行動するような、その場かぎりの衝動性が、1回目よりも2回目のほうがより顕著になっているようである。

## 5. 「17. 色彩の関与」について

1回目も2回目も、色彩反応とコード化されるような反応において、A子には感情の揺らぎがまったく認められなかった。情動的な反応といえるのは、2回目「全然立体感がないんです4-2」の箇所だけである。したがって、この意味で、A子の色とのかかわりを感情と直接的に結びつけて論じることができない。全体としての反応態度は、1回目も2回目も、わりと淡々としたものであった。

まず1回目の反応について検討する。「色合い、ピンク10-1」も、「黒いクモのような悪魔10-2」も、基本的に形態が志向されている。それにとってつけたように、あくまでシンボリックなレベルで色彩が追加されている。つまり前者は、男は青、女は赤・ピンクというレベルで、後者は、天使は白、悪魔は黒というレベルである。

このことは、「血2-2」にもみてとれる。ここでは「イメージとして出たのは血」とか「赤いものの印象が血」と述べていて、インクプロットというよりも、むしろ思考のうちにある血の色彩的なイメージに触れているかのようなのである。

加えて、これは質疑漏れだが、「火か何かを囲んで、火のイメージ3-1」という反応では、赤色領域の色彩が中央下部の黒色領域に転位されている。インクプロットの形態とその領域の色彩が密接に結合しているわけではないことが、ここからも読み取れるであろう。

「ランプ9-2」は、直前の「噴水9-1」とは違って、mではない。運動よりも形態が志向されている。もう少し聞けば色彩について具体的なものが話されたのかもしれないが、「明るい感じ」とだけ言及している。しかし、「内炎」「外炎」という表現からは、色を「火」という概念形成のために使うというよりも、むしろ大雑把な領域の区分のために使っていることが理解されるし、「明るい感じ」という表現からは、色彩から印象として



の明るさを受け取っているにすぎないことが推測される。

次に2回目の反応について検討する。まず「ランプ9-2」である。これは1回目の「ランプ」と同様に理解できるであろう。

次に、9-3「活きのいい葉っぱ、オレンジっぽいから枯れてる」である。この反応は基本的に形態が志向されていて、活きがいいことと枯れていることに色彩がきちんと結び付けられているので、FCの基準を満たしているであろう。

次に、10-2「花の断面図」である。これは多彩色図版に花という反応であれば色彩反応にコード化するという規定に従えばCFとかFCになるが、A子の場合は「スパッと」切ったことが強調されているだけで、色彩が有意味に反応に取り込まれているわけではない。同様の反応が無彩色図版「花の断面図6-2」にも認められることから、この反応は形態のみ志向したFとコード化するのが適切であると思われる。

次に、10図版の「アマガエル、サトウのゾウ6-7」である。アマガエルは質疑漏れだが、サトウのゾウは基本的に形態が志向されている。しかし、やはり「色から」アマガエルとサトウのゾウを連想したことが述べられており、ここでも色彩の連想的な価値が強調されている。このような特徴は、「最初に明るいもの連想したんです10-1」という表現にも見て取れるし、「一瞬きれいな花に見えて8-3」という表現にも見て取れる。これらの反応では、たとえば「ここが茎で、ここが花弁で」というふうに基本的には形態を志向していて、色彩はあくまで直観や連想を触発する価値にウェイトが置かれているにすぎない。「13. 瞬視」の表現が多いことも、このことを裏打ちするはずである。

それから、反応領域と色彩、あるいは反応概念と色彩の結びつきが曖昧であることは、同一の領域に二つの概念を見たり、あるいは

同一の概念を二つの領域に見たりするような反応に現れている。たとえば、「火の玉、執念3-2」、「血とか脳みそ3-3」、「オレンジだから夕焼けと思ったのかな、ピンクだから夕焼けと思ったのかな9-4」である。

要約すると、1回目も2回目も類似する特徴が認められる。まず、色彩部分だけとると、pureC（1回目はⅡ図版の「血」、2回目はⅨ図版の「夕焼け」）からCF、CFからFCにわたる幅広い色彩反応がいずれにもある。FCにおいては基本的に形態が志向されているものの、色彩による連想的な触発が認められるので、それは能動性に絡む受動性を反映しているように思われる。

具体的に解釈すると、それは彼女の生き方、ライフスタイルに対応しているのであろう。A子はもともと活動的な人であったが、一見能動的に見えたとしても、自分では主体的に自分の人生を生きているとは考えていなかった。反応としては、たとえば「16. ～ちゃった」に分類した、1回目「羽が（考えとして）出ちゃった5-2」、2回目「見えちゃった9-5」に直接読み取れるかもしれない。ここから読み取れるように、A子は自分があることをしたのだという自発性や能動性を感じているわけではなく、自分を越えた何らかの力によってそうすることを余儀なくされたと感じやすいのである。相手のせいにするということも含めて、自分以外の他者に自分の主体性を明け渡してしまう傾向が認められるわけである。

それから、一点だけ付け加える。2回目「花の断面図10-2」についてである。色彩が関与していてもよさそうであるが、この反応には色彩が取り込まれていない。しかし、「血しぶき2-1」に、言語行為によって形成された色彩反応として彼女の衝動性が分節化しているそのように、「花の断面図」には、「スパッときる」という身振りに衝動性が分節化しているように思われる。すべてを内に

含んだ原初的なマトリックスから、どこに衝動性が分節化するかということに関して言えば、彼女の場合は色彩反応に限定されないようである。

## VI. 考 察

### 1. 癒合促進的状況としてのロールシャッハ状況

以上の反応解釈を、次は、事前に持っていた問題意識である、癒合性、自己中心性、刺激拘束性の視点から組み替えて理解することにする。

その前に、ロールシャッハ状況について、若干検討を加えておく。クライアントがロールシャッハ状況に参加するということは、すでに備えている安定した枠組に対抗するような、不慣れな状況におかれるということである。つまり、本来的にロールシャッハ状況には、自己中心性や刺激拘束性へといたる可能性のある、癒合的な潜勢力が備わっているのである。クライアントは、自分にとって安定した世界を維持するために、そのような新たな状況におのれを再調節して均衡をはかろうとする。しかし、このような適応のプロセスは受動的に達成されるのではなく、能動的に意図することによって達成される学習の問題であるから、もしも癒合促進的状況に対抗するクライアントの力が脆弱であれば、自己中心的な反応や刺激拘束的な反応が頻出するはずである。

査定者とのやり取りの中で展開するロールシャッハ反応過程は、上記のような意図を伴いながら、反応ごとにそのつど自己を形成していくプロセスである。そして、そのようにして形成される反応には、クライアントの自己がそのつど「微視発生 (microgenesis)」(Werner and Kaplan, 1963) するプロセスが反映される。したがって、そのつどの自己がどの水準で分節しているのかは、言い換え

ると自己と対象の分節度は、反応そのものに如実に現れるといえるであろう。

では、癒合性とそこから派生する自己中心性および刺激拘束性が、どのようにロールシャッハ・テストに反映されるのか検討する。癒合性 (大域的知覚と諸部分への未分節)、自己中心性 (自己中心的空間定位、対象の同化)、刺激拘束性に分けて論じる。

### 2. 自己中心的空間定位

ロールシャッハ・インクプロットは画像である。したがって、その空間的特性について考えるためには、描画や画像知覚についての知見が役に立つ。まず、Arnheim, R. (1974) の描画発達に関する知見を参考にして、ロールシャッハの画像空間について検討を加える。

視覚による統制よりも運動衝動が優位の段階では、描画はスクリブル中心であり、運動としての鉛筆の痕跡にはまだ「何か」が表示されているわけではない。この段階ではまだじっくりと着席していること自体が困難なので、おそらくロールシャッハ図版はフリスビー (玩具) として利用されるだけであろう。

最初のスクリブルは何かを表現しようとする意図の下に描かれたものではないが、頭足人間のような「根源的円環 (primordial circle)」が出現すると、一様な紙面から図 (内空間と外空間) が分節化して、それが物の性質を備えるようになる。そして、紙面上に横たわるその円は丸さを表わすのではなく、様々な対象を表示する。ロールシャッハ反応が可能となるのは、おおむねこの段階である。描画はその後分化を遂げて、次第に方位が明瞭になっていく。もちろん、ロールシャッハ反応も、である。

垂直や水平といった空間的方位が未分化な段階では、絵は画用紙の紙面の上に横たわるようにして描かれるであろう。その後、縦横の関係が分化していき、各領域の部分的整合

(全体的不統合)から、各部分が全体のなかに位置づけられる全体としての空間の統合へと至る。運動の様態も、部分の相対的空間方向への移動から (m や FM の構造に類似している)、胴体そのものが屈曲するなど、内的な構造を持った統一体の運動に移行する (M の構造に類似している)。

ロールシャッハ図版の空間は、「水平空間 (horizontal space)」と「垂直空間 (vertical space)」に分節化する。前者は、風景や敷物などを「上から見た」というかたちで鳥瞰する構図で描写されるもので、平面図における羅針盤のようなものである。ここでは図版の紙枠が東西南北の方位にあたり、図版の紙面そのものが基底面として利用される。それに対して後者は、人物や樹木などの立っているものが正面図や側面図として描写されるものである。ここでは、上下左右という図版の紙枠ないし四辺、換言すれば三次元的な空間枠組が反応定位の基準となる。

このように考えると、図版の紙枠 (四辺) すなわち整合的な関係系を基準として反応が視覚によって定位される場合には、反応の垂直方向と水平方向が紙の四辺と一致した反応が表出されるであろう。反対に、自己中心的に定位される場合には、図版の紙面そのものが反応の基底となり、面的な反応や鳥瞰的ないし仰視的な構図の反応が表出されるであろう。おそらく、ロールシャッハ・テストには、動き回る子供の多様な視点の世界、つまり紙面の上下左右どこにも組み立てることの自在な世界と、身体を静止して視点をひとつに据える大人の視覚の世界、つまり垂直-水平が図版の四辺と一致する固定した世界、これらの二つの世界 (あるいは中間の世界) が現れるはずである。しかし、もしも空間体験が破壊されているのであれば、上下、左右、奥行などの水平方向と垂直方向からなる空間枠組の中に納められた、ひとつの視点に統合された安定した空間は、影を潜めるであろう。

もちろん、発達のいって、画像知覚における二次元的な見方と透視画的な見方が未分化であるうちにも、ロールシャッハ反応には水平空間と垂直空間が現れる。その際に、垂直空間としての反応が出現した場合には、内実のある個物というよりも、むしろ物の垂直面 (表面) が表示されているだけであると理解すべきである。だが、成人の一見垂直空間に見える反応が、そのような表面を表示している場合、それを見分けることには困難が伴うかもしれない。

水平空間を示唆する反応は、カテゴリーとしては、「6. 白図の等置」「7. 地図」「8. 断面図」「9. レントゲン写真・模型図」に対応するであろう。1回目の1個 (4%) から2回目の6個 (17%) に増加したにすぎないが、「6. 白図の等置」に見られるような反応がわずかでも増加すれば、深刻に受け取る必要があろう。

それから、自己中心的空間においては、身体に近い手元の刺激が身体的位置や姿勢の変化に関連づけて解釈される。そこでは、客観的な空間枠組 (図版の紙枠) ではなしに、もっぱら自己身体を基準として空間が秩序づけられており、具体的に目で見たり手で触れたりすることの可能な、「今ここ」で目下にする感覚運動的な空間が顕在化する。したがって、反応の水平-垂直次元に着目する以外に自己中心的空間を見て取るためには、たとえばすでに述べた Schachtel のモーター・レスポンスやその近縁の反応に着目するとよい。

カテゴリーとしては、「14. 図版枠からの越境」に含まれる「切り抜く」「睨まれている」「潰される」などの反応が該当するであろう。1回目の6個 (23%) から2回目の11個 (31%) へと増加している。このような反応からは、自己身体である「ここ」と図版である「そこ」との関係が癒合的になっていて、体験世界が「今ここ」に現前する手の届く範囲に収縮していること、言い換えると、一定

の時間の厚みと空間の拡がりを含む現前する世界、つまり目下にする触覚的な状況に拘束されて、そこを超え出ることが困難であることが理解されるのである。

それから、「5. 向かい合ってる」に含めた反応は、上記の「6. 白図の等置」よりは分節化しているものの、図版の紙面上の配列が言及されただけのものであり、左右の対象が有機的に関連づけられているとは言いがたい（「4. 映る」に含めた反応は関連づけという意味で「5. 向かい合ってる」よりも多少構造化されている）。これは、二つ（複数）の図が、対向的布置において反照し合いながら共在する事態を反映したものである。「向かい合ってる」「左右対称」「背中合わせ」という表現は、原初的な場所的規定がそのまま表出されたものなのであろう（1回目4個（15%）、2回目8個（22%）である）。

最後に、図版位置に関する言及についてである。1回目は図版の回転が皆無で、全てが正位置の反応であることが特徴である。そのせいか、図版位置に関する言及も皆無であった。それに対して、2回目はVI図版（自由反応段階）から図版の回転が生起していることが特徴である。

図版位置の変化と固定化は、図版を手にして回転させる運動や、図版を静止して空間に定位する運動と表裏をなしている。クライアントにとっては、図版が最初に手渡された位置が正位置であり、それを180度回転させると「逆」、90度ないし270度回転させると「縦」になる。そもそも図版を回転させることは、自己身体を基準とした定位活動であり（図版を基準とするなら机の上に図版を置いてその周囲を移動することになるであろう）、その身体運動が静止して地となることで図版位置が図化されて顕在化するに至る。つまり、空間における図版の回転と固定化は、反応としてインクプロットが分節化するための前提であり、定位活動である身体運動の静止すなわ

ち図版位置の固定化を下部構造とすることで、はじめて図版の紙面が空間として構造化されるのである。

しかしながら、クライアントは端的に「何に見えるか」を問われているのであって、どのような図版位置で見たのかについて問われているわけではないのであるから、このような図版位置そのものは自明のこととして地化され、「～のように見える」という反応だけが主題化（図化）されて顕在化するはずである。したがって、図版位置が顕在化するのとは、通常であれば地化されるべき反応の下部構造、つまり自己身体を基準とした自己中心的空間定位が準地的＝準図的に現出しているということである。

### 3. 癒合性

癒合性、つまり大域的知覚と諸部分への未分節について知るためには、形態質に着目する必要がある。ロールシャッハ・テストには、すでに Werner (1948, 1953, 1954, 1955) の発達理論を応用したスコアがあるので、これを利用することが可能である。Hemmendinger, L., and Schultz K.D. (1977) を以下に要約する。

1. Wa: 「黒い絵の具」「黒と赤、サッカー・チームの色」など、無定形 (amorphous) の、形態要素が皆無の全体反応のこと。
2. Wv: 「島」「岩」など、若干の形態要素が含まれてはいるものの、インクプロットの全体的印象に基づいているだけで、漠然とした (vague) 全体反応のこと。
3. W-: 「旗 (I 図版)」「ヒトデ (IV 図版)」など、反応内容とインクプロットが適合せず、明確な形態を欠いた全体反応のこと。
4. DW: 「(中央上部を猿の顔と知覚し、それを全体に敷衍する) 猿、チンチラ

- (IV図版)」などの作話的全体反応のこと。
5. Wm：「コーモリ（V図版）」「お面（I図版）」など、反応内容とインクプロットが適合しているものの大域的な（gross）輪郭が利用されている，ありふれた（mediocre）全体反応のこと。ただし，I図版，IV図版，V図版，VI図版，IX図版という，まとまりのある五枚の図版のみがスコアの対象である。例外として，VII図版は，「橋」「入り江」「どんぶり鉢」など，全体の大域的な外輪郭（Uの形状）が使用されていれば，このスコアを評定する。
  6. W+：「二人の人がバーで乾杯している（II図版）」「帆掛け舟（VIII図版）」など，反応内容とインクプロットが適合し，分離した諸部分が全体として統一的に結合されている全体反応のこと。ただし，II図版，III図版，VII図版，VIII図版，X図版という，まとまりのない五枚の図版のみがスコアの対象である。
  7. W++：「男の人がバツタの衣装を着てスケートしてる。ショーのファイナル。女の子が二人，腕の中で休んでいる（V図版）」「噴水があって，その周りに犬が二匹いるところかな（I図版）」など，反応内容とインクプロットが適合し，まとまりのあるインクプロットが分節化しながら諸部分が全体に再統合されている全体反応のこと。ただし，I図版，IV図版，V図版，VI図版，IX図版という，まとまりのある五枚の図版のみがスコアの対象である。
- 以下は部分反応である。反応例のみ示す。カテゴリーの定義は，上記の全体反応に準じている。
8. Da：「火（II図版上部赤色部分）」「照明されたお部屋。照明の光です（X図版青色，黄色，茶色，緑色領域）」などの普通部分反応のこと。
  9. Dv：「何かの地図のように見えます（IX図版緑色領域）」「水です。水しぶき（X図版青色領域）」などの，普通部分反応のこと。
  10. D-：「アシカのように見えます（IX図版オレンジ領域）」「ハチです（VIII図版両側ピンク領域）」などの，普通部分反応のこと。
  11. DdD：「繭とか，毛虫とか（X図版ピンク領域上部の輪郭にのみ基づいている）」「私には象のように見えます（II図版黒色領域上部の輪郭のみ「頭」とした）」などの，稀有部分反応のこと。
  12. Dm：「蝶ネクタイみたいな（III図版中央赤色部分）」「ちっちゃな鳥（X図版外側黄色領域）」などの，普通部分反応のこと。
  13. D+：「二匹のねずみと一緒に木に登っています。こっちとこっち（VIII図版両側ピンク領域と中央上部）」「二人の男の人が太鼓を叩いています」など，反応内容とインクプロットが適合し，二つ以上の分離した領域（普通部分）がひとつのパーセプトに統合されている普通部分反応のこと。
  14. D++：「ここは面白い風刺漫画みたく見えます。人が動物か何かに乗っています（IX図版緑色領域）」「オレンジのところは，帽子をかぶった人がラッパを吹いているように（IX図版）」などの，普通部分反応のこと。
  15. FaC：「変な教会があって，グレープフルーツが教会にのっかっています（VIII図版，両側ピンク領域の一方を「トラ」他方を「グレープフルーツ」残りを「教会」として）」などの，作話的結合反応のことである。
  16. CoR：「クマのそばにいるカブトムシ



(V図版, 全体を「カブトムシ」, 次に同じく全体を「クマ」その後で)」などの、混淆反応のこと。

上記の基準によってスコアし、その数値を要約したものが表5である。表の下段に、「未分化-」「分化+-」「分化+」という三つのカテゴリーがあるが、これらは分節化の度合いによって各コードを三段階にまとめたものである。「未分化-」には、Wa, Wv, W-, Da, Dv, DdD, D-, FaCが、「分化+-」には、Dm, Wmが、「分化+」には、D+, W+, D++, W++が、それぞれ含まれている。

この三段階の構造の数量的変化に注目すると、癒合的であることが明白な大域的知覚としての「未分化-」が、1回目の19%から2回目の39%に増加している。それとは逆に、平均的な水準の知覚としての「分化+-」が1回目の50%から2回目の39%に減少し、比較的分節化した知覚としての「分化+」が1回目の31%から22%に減少している。

これらのことからいえるのは、A子の知覚を階層構造としてとらえると、上層部から下層部に向けて地滑りが起こったということである。しかし、それとは明らかに矛盾する結果も認められる。「D++, W++」というよく分節化した反応が、1回目の3.8%から2回目の11.1%に増加しているのである。加えて、2回目の「未分化-」の数値を増加させた主たる要因は FaCつまり作話的結合反応（作

話反応）であるのだが、これらは形態質だけとると「分化+」に算定可能なものばかりである。かりに2回目の FaC をすべてそのようにして再計算すると、「未分化-」が1回目19%→2回目22%、「分化+-」が1回目50%→2回目39%、「分化+」が1回目31%→39%ということになる。

これは一体何を意味するのであろうか。A子の W%は、1回目65%、2回目64%であり、変化はない。さらに詳細に検討してみよう。「未分化-」に算入される反応を (FaCを除いて) W と D に分けて考えると、W は1回目1個 (4%) から5個 (14%)、D は4個 (15%) から3個 (8%)、同じく (FaCを加える) 「分化+」に算入される W は、1回目6個 (23%) から2回目12個 (33%)、D は1回目2個 (8%) から2回目2個 (6%) である。

以上のことを要約すると、次のようになるであろう。つまり、1回目から2回目にかけて、A子の知覚の階層構造は大きくバランスを変化させたということ、その変化は、知覚の重心が未分化な層と分節化した層に両極化して、そのために知覚の中間層が犠牲になっていること、である。知覚の構造が単に地すべりを起こすのであれば、諸部分の分節化が減少して大域的知覚が増大するだけであるが、A子に起こったバランスの変化は、知覚の中間層が減少して大域的知覚と諸部分の分節化がともに増大したということである。

表5. 発達スコア

	1回目	2回目	1回目/反応総数	2回目/反応総数
Wa, W-, FaC,	1	10	3.8%	27.8%
Da, DdD, D-, Dv	4	3	15.4%	8.3%
Wv	0	1	—	2.8%
Dm, Wm	13	14	50.0%	38.9%
D+, W+	7	4	27.0%	11.1%
D++, W++	1	4	3.8%	11.1%
未分化-	4	14	19%	39%
分化+-	13	14	50%	39%
分化+	8	8	31%	22%



#### 4. 対象の同化と刺激拘束性

まず対象の同化について検討を加える。対象の同化は、概念としては、刺激拘束性と方向性が反対である。もちろん、癒合性において両者は共可能的であるが、自己に向かってくる刺激に拘束されて状況からの自主独立が妨げられるのが刺激拘束性であり、自己枠によって自己中心的に状況を変化させるのが同化なのである。したがって、同化を広く捉えると、自分の都合によって対象を恣意的に規定したり（過剰な投影といえよう）、自分の着想に拘泥したり、ということとして理解されるであろう。

Leichtman, M. (1996) によると、ロールシャッハ・テストが施行可能な2歳半から3～4歳までは固執反応の優勢な固執的アプローチの段階、3～4歳から6～7歳までは作話反応の優勢な作話的アプローチの段階である。自他の分極化がはたされていないと、インクプロットとは無関係にもっぱら自己枠による反応が繰り返されたり（固執）、インクプロットが単に主観的プロセスを発動させる役割しか担わなかったり（作話）、ということが起こるのである。同化を見て取るためには、作話反応を中心として、作話的結合反応や現実を歪曲するような言語表現に着目するとよい。ただし、成人に固執反応が現れることはまれであるから、それについては自分の着想に対して何らかの拘泥がないか着目するとよい。

カテゴリーとしては、「3. 動のAspect」「15. 文脈への言及」として規定した反応に該当するであろう。固執反応は1回目も2回目も皆無であるが、2回目になると過度に主観的な描写が増加している。また「17. 色彩の関与・非関与が想定される反応」から理解されるように、A子にとって色彩は連想を触発する価値が主であって、刺激の意味づけはあくまで自己枠が優勢である。

では次に、刺激拘束性について検討を加え

る。ロールシャッハ・テストにおける刺激拘束性といえば、通常は色彩反応との絡みで捉えられることが多い。たとえばShapiro, D. (1956, 1960) は、色彩反応において形態要素が減少するほど刺激拘束的であることを論じている。したがって、刺激拘束性（臨床的には衝動性や、気分および感情の不安定性と結びついている）を見て取るために着目すべきなのは、まずもって色彩反応であることに疑いはない。しかしながら、刺激拘束的であり得るのは色彩だけではない。インクプロットの形状や、色の形によって境界づけられている領域そのものなど、クライアントの自主独立が妨げられているのであれば、色彩以外にも着目していく必要がある。

色彩反応に着目すると、1回目にも2回目にも純粋色彩反応が認められる。さらに、たとえば、いずれにも共通するIX図版の「ランプ」という反応を見ると理解されるが、この反応では、色によって分けられた領域をそのまま受け取って、受動的に状況から規定されていることが見て取れる。また「16. ちゃった」からは（1回目1個（4%）、2回目6個（17%）である）、反応の責任主体が自己以外のところに明け渡されていて、状況の力によって受動的に拘束されていることが理解される。自己と対象が分節化していないと、インクプロットに触発された印象は意識的な自己にも、分節化した外的対象にもクリアに帰属することがないので、単に紙面の上に広がるだけか、未分化な自己と対象とのあいだに解離されるかである。「ちゃった」という表現には、そのような事態が映し出されているのであろう。

刺激拘束性には、もうひとつ着目すべき点があった。それは対象の恒常性の欠如である。インクプロットを手にするクライアントの身体は、それを回転させるときは除くが、ほとんど静止した状態にあるので、外的姿勢の変化がもたらす恒常性の変化については考える

必要がないのがロールシャッハ・テストである。したがって、あいまいな画像を見てそれが何であるのか識別するクライアントの内的状態(感覚トーン)が動揺すれば、識別された対象の同一性にも動揺が発生することになり、われわれが刺激拘束性を見て取るためには、そのようなクライアントの言葉に現れる動揺に着目すればよいのである。具体的には、主語と述語の動揺ということになるであろう。

木村(2001)によれば、内省的判断に先立って必ずそこには判断の主体と客体との根源的同一の全体的直観があり、これが後に主語と述語に分節化される。その際にノエマ的限定が強ければ客観的对象の即物的判断が生じ、ノエシ的限定が強ければ主観的意味表象のごときものになると考えられる。「ノエシ的」というのは、たとえば私が赤い花をみているという「こと」、赤い花があるという「こと」のように、決して「もの」として対象化することのできない主客未分の事態をさしている。「ノエマ的」というのは、記憶や表象などの観念的な対象も含めて、意識の内容として、志向的对象として、われわれに気づかれるかぎりでの「もの」のありかたをさしている。そしてわれわれは、主語として確立されるいろいろな「もの」を、いまここにある「こと」というかたちで、述語的、意味的に統一しているのである。木村の言う「ノエシ的身体性」はWernerの「感覚トーン」に、「可視的・ノエマ的身体」は「外的姿勢」に、それぞれ対応するであろう。その意味で、述語の揺らぎは前者に、主語の揺らぎは後者に結びつくわけである。

カテゴリーとしての「1. 主語・述語の揺らぎ」について再検討してみよう。注目されるのは、1回目には主語部分の揺らぎが認められたものの述語部分のそれは認められなかったこと(主語7個(27%), 述語0個)、2回目には主語部分の揺らぎも述語部分の揺らぎ

も認められ(主語15個(42%), 述語13個(36%)である)、両者が極端になっていることである。ここから理解されるのは、内的状態である感覚トーン、あるいは生きられる身体であるノエシ的身体性による述語的統合が揺らぎのうちに顕在化して、1回目よりも2回目のほうが刺激拘束性を強く被っているということである。

## 5. 要約とフィードバック

離人症ないし自明性の喪失が発症する直前である1回目と、それが慢性化して症状が固定化した状態である2回目のプロトコルを比較することで、結果として、1回目よりも2回目のほうが自己と対象との分極性が崩れ、癒合性と、そこからくる自己中心性や刺激拘束性が顕著になったことが理解された。必然として、A子の視空間は未分化で不安定な状態に置かれているので、空間は主として自己中心的に定位され、視空間の客観的空間枠組が定位の基準とはなっていないのであろう。

しかしながら、2回目のIV図版②「ぜんぜん立体感がないんです」という訴えに現れているが、A子には苦痛感を強調するところがあるのも確かなことである。いわゆる「自己欺瞞(self-deception)」(Shapiro, D., 1989)である。MMPIは施行していないが、もし施行したとすれば、おそらく妥当性尺度は逆V字型を描いていたことであろう。2回目のロールシャッハ・テストが施行された背景には、症状からくる苦悩の訴えに終始し、器質的な異常を確信するA子と、毎回繰り返されるそのような訴えに耳を傾ける私との、閉塞した治療関係があったのである。

結果のフィードバックは、知覚と空間定位に関わることだけ伝えることにした。ロールシャッハの要約表は、Smith, B.L. (1997)がいうように個別事例においては不正確であることがよくあるので、提示しなかった。まず私は「ルピンの杯」を用意してそれをA

子に提示し、何に見えるのか尋ねた。すると、予想した通り、顔と杯が同時的に見えて選択しがたいということであった。それから、インクプロットを提示して、図と地の構造が奇妙であったロールシャッハ反応を具体的に説明し、それをルピンの杯と関連づけた。さらに、両眼複視や向こう側が透けて見えるオカルト的な現象についても、図と地の概念を使って説明した。そして、「脳の写真（CTやMRI）を撮ってもそれに写るとは限らない病気ですが、心理学的には“面病”“図-地病”であるのかもしれないね」と話すと納得し、理解されているという安心感を得ることができたようである。

また、知覚の階層構造に関わるバランスの変化について、以下のように比喻を用いて説明している。すなわち「地盤沈下が起こって、あなたはすっぽり地面に埋まっているようです。しかし、埋まったままでいないのが、あなたの底力なのかもしれません。地上に這い上がろうとして色々な努力をされていますから、腰からは地上に出ているような気がします。ただ、ひとつだけ問題があります。あなたが見ている目線の高さ、他の人たちの目線の高さが随分と違うものですから、あなたと周囲の人では見えるものも違って、一緒にいたとしても別の風景が見えてしまうということです。野球にたとえると、多くの人はストライク・ゾーンのど真ん中を意識してバッター・ボックスに立ちますが、あなたの場合は、そのまま高めか低めが意識されるか、ストライク・ゾーンの外側が見えてしまうのです。ですから、現実の場面に話を戻しますが、おそらくあなたには相手と話が通じにくいとか、相手が自分のことをなかなか分かってくれないという感覚があるはずです。ちょうど、いままでの私とあなたのように」である。それまでの心理療法場面では、私に対してことごとく否定的な態度を向けていたA子であったが、私のこの要約と問い

かけに対しては肯定している。

治療状況は、それを転機として新たな展開へと動き出していった。次第に自明性の喪失は影を潜め、それに取って代わるようにして、アルコールの乱用が目立つようになってきたのである。さらに心理療法では、家族内の葛藤や異性関係を含めた対人関係について話すようになっていった。アプローチとしては、個人心理療法からグループへと視野を拡大する必要性が見えてきたといえるであろう。

## V. 結語

A子の精神病理は重篤なものであることに疑いはない。しかし、精神科医は統合失調症を否定している。私も、統合失調症への移行は考えにくいと判断した。おそらく臨床家の中には、2回目に極端な作話的反応が増加したことや形態質のよくない反応が出現したことを根拠として、A子が統合失調症に至る可能性や、潜伏性統合失調症？である可能性を危惧するものもいるのかもしれない。

私が上記のような結論に至ったのは、まずもってA子と心理療法での関わりがある上に、ロールシャッハ状況における具体的な触感を持っていたからである。いわゆる盲分析を行っていたとすれば、私も誤診していたはずである。A子はSISTER図版としてIV図版を選択し、「ひきつぶされているという、親につぶされたという、アダルト・チルドレンだから」と説明しているが、自分自身についても普段からアダルト・チルドレンを自認していた。治療の方針は、もちろん統合失調症を想定したトリートメントではなく、むしろ生きづらさに焦点を合わせたものであった。

村上（2006）は「もし、ロールシャッハ記録だけから正しい解釈にたどり着けないのなら、検査者は単に人相や話し方から、性格や精神障害を推定していることになる。賢いハンス（馬としては驚異的な知的能力があるよ

うに見えるが、実は観客の表情を読んで簡単な計算の答えを出す馬のこと(筆者注)同様、相手を観察できなければ、何もできないのである。ロールシャッハ・テストに図版など不要である。もし、そうならロールシャッハ・テストも不要である」と述べている。ロールシャッハ・テストをサイコメトリーとして利用するのであれば、村上の批判はあたっていないこともないと思う。かりにインクブロット・テストをもっぱらサイコメトリーとして使用するのであれば、われわれは、そのアキレス腱である反応数がしっかりと統制されたホルツマン・インクブロット・テストに乗り換えるべきなのかもしれない(Aronow, E., Reznikoff, M., & Moreland, K.L., 1995)。

だが私は、臨床面接の媒介として利用したときにこそ、インクブロットは驚くべき力を発揮してくれると思っている。また、Finn, S.E. (1996a) とともに、MMPI と併用することによって厚みのある査定が可能になると考えている。

村上 (2006) はさらに、ロールシャッハ・テストを受験するクライアントが「検査者を欺くのは簡単」であると述べ、その価値を否定している。MMPI のような質問紙法には虚偽の回答を検知する仕掛けがいくつもある、というわけである。ところが、現代の心理査定は、もはやそのような一方的「情報収集モデル」ではなく、共同制作的「治療モデル」に依拠したものにシフトしているのも事実である (Finn, S.E., 1996b, 2005 ; Finn, S.E. & Tonsager, M.E., 1997)。査定者とクライアントの関係が、騙す・騙されないという不信に満ちたものであるのなら、もはや心理査定を実施する意味などない。

ともあれ、事後的な解釈場面で行われるのは、具体的なロールシャッハ状況における理解を超えながら継承し、変形しながら解釈することである。つまりわれわれは、すでに過ぎ去ったロールシャッハ状況を捉えなおすこ

とと、プロトコールを読み込むことによる新たな創造を、解釈というひとつの行為によって結びつけるのである。そこで到達するのはひとつの見立てであるが、それはあくまで生きたクライアントとの関係を離れた分析的思考によって、ロールシャッハ状況の外側からそれを再構成することに他ならない。

ここでロールシャッハ・テストが終わるわけではない。査定者の解釈は、フィードバック面接においてクライアントの判定に従うことになる。その結果として、おのれの解釈に同化することのできない状況や関係が過剰になったときそれらは変質し、別なかたちの状況と関係が出現することになる。そのとき治療関係の様相は一変し、心理療法の新たな段階が創造されるはずである。

#### [参考文献]

- 天ヶ瀬正博 (1994) 環境・地図・遠近法・定位。イマージ、5(2), 143-153青土社。
- Arnheim, R. (1974) *Art and Visual Perception: A Psychology of the Creative Eye (The New Version)*. University of California Press, Berkeley.
- Aronow, E., Reznikoff, M., & Moreland, K.L. (1995) The Rorschach Technique or Psychometric Test? *Journal of Personality Assessment*, 64(2), 213-228.
- Blankenburg, W. (1971) *Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit. Ein Beitrag zur Psychopathologie symptomarmer Schizophrenien*. Ferdinand Enke Verlag, Stuttgart. (木村敏, 岡本進, 島弘嗣訳 (1978) 自明性の喪失—分裂病の現象学。みすず書房。)
- Exner, J.E. (2000) *The Rorschach: A Comprehensive System: Basic Foundations and Principles of Interpretation*. John Wiley & Sons, New York.
- Finn, E.S. (1996a) Assessment Feedback Integrating MMPI- 2 and Rorschach Findings. *Journal of Personality Assessment*, 67(3), 543-557.
- Finn, S.E. (1996b) *Manual for Using the MMPI- 2 as a Therapeutic Intervention*. University

- of Minnesota Press, Minneapolis. (田澤安弘, 酒木保訳 (印刷中) MMPI で学ぶ 心理査定フィードバック面接マニュアル. 金剛出版.)
- Finn, S.E. & Tonsager, M.E. (1997) Information-Gathering and Therapeutic Models of Assessment: Complementary Paradigms. *Psychological Assessment*, 9 (4), 374-385.
- Finn, S.E. (2005) Collaborative Sequence Analysis of the Rorschach. Paper presented at the XVIII International Congress of the Rorschach and Projective Methods, Barcelona, July 26.
- Gibson, J.J. (1979) *The Ecological Approach to Visual Perception*. Houghton Mifflin Company, Boston. (古崎敬, 古崎愛子, 辻敬一郎, 村瀬旻訳 (1985) 生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る. サイエンス社.)
- Goldstein, K. (1934) *Der Aufbau des Organismus*. Nijhoff. (村上仁, 黒丸征四郎訳 (1957) 生体の機能. みすず書房.)
- Gurwitsch A (1929) *Phenomenology of Thematics and of the Pure Ego: Studies of the Relation between Gestalt Theory and Phenomenology*. In John Wild et al eds. (1966) *Studies in Phenomenology and Psychology*. Northwestern University Press, Evanston, pp.175-286.
- 林部敬吉 (1995) : 心理学における三次元視研究. 酒井書店.
- Hemmendinger, L., and Schultz, K.D. (1977) Developmental Theory and the Rorschach Method. In Rickers-Ovsiankina, M.A. (eds.) *Rorschach Psychology*, Krieger, New York, pp.83-112.
- 廣松渉 (1972) 世界の共同主観的存在構造. 勁草書房.
- 片口安史 (1987) 改訂 新・心理診断法. 金子書房.
- 木村敏 (2001) 初期自己論・分裂病論. 木村敏著作集1. 弘文堂.
- 金田一春彦 (1976) 日本語動詞のテンスとアスペクト. 金田一春彦編 (1976) 日本語動詞のアスペクト. むぎ書房, pp.27-61.
- Klopfer, B., Ainsworth, M.D., Klopfer, W.G., and Holt, R.R. (1954) *Developments in the Rorschach Technique Volume I*. Harcourt, Brace & World, Inc., New York.
- Leichtman, M. (1996) *The Rorschach: A Developmental Perspective*. The Analytic Press, Hillsdale.
- 牧野達郎 (1970) 視空間の定位と身体運動. 講座心理学4知覚, 東京大学出版会, pp.191-212.
- Merleau-Ponty, M. (1945) *Phenomenologie de la perception*. Gallimard, Paris. (竹内芳郎, 木田元, 宮本忠雄訳 (1967, 1974) 知覚の現象学1, 2. みすず書房.)
- 村上宣寛 (2006) 心理テストをめぐる誤解と無理解. *アディクションと家族*, 23(2), 128-137.
- 中村雄二郎 (1979) : 共通感覚論—知の組みかえのために. 岩波書店.
- Piaget, J. (1936) *La naissance de l'intelligence chez l'enfant*. Neuchatel Delachaux et Niestle. (谷村覚, 浜田寿美男訳 (1978) 知能の誕生. ミネルヴァ書房.)
- Rapaport, D., Gill, M., and Schafer, R. (1946) *Diagnostic Psychological Testing II*. Year Book Publishers, Chicago.
- Rorschach, H. (1921) *Psychodiagnostik*. Bircher, Bern. (鈴木睦夫訳 (1998) 新・完訳精神診断学. 金子書房.)
- Schachtel, E.G. (1966) *Experiential Foundations of Rorschach's Test*. Basic Books, New York.
- Shapiro, D. (1956) Color-Response and Perceptual Passivity. *Journal of Projective Technique*, 20(1), 52-69. (田澤安弘訳 (2005) ロールシャッハ色彩論. 大学教育出版, pp.66-97.)
- Shapiro, D. (1977) A Perceptual Understanding of Color-Response. In M.A.Rickers-Ovsiankina (eds.) *Rorschach Psychology* (second edition). Krieger, New York, pp.251-301. (田澤安弘訳 (2005) ロールシャッハ色彩論. 大学教育出版, pp.1-65.)
- Shapiro, D. (1989) *Psychotherapy of Neurotic Character*. Basic Books, New York.
- Smith, B.L. (1997) *White Bird: Flight from the Terror of Empty Space*. In Meloy, J.R., Acklin, M.W., Gacono, C.B., Murray, J.F., and Peterson, C.A. (eds.) *Contemporary Rorschach Interpretation*, Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Mahwah, pp.191-215.
- Stratton, G.M. (1896) Some Preliminary Experiments on Vision without Inversion of the Retinal Image. *Psychological Review*, 3, 611-617.
- Stratton, G.M. (1897) Vision without Inversion of the Retinal Image. *Psychological Review*,



- 5, 632-638.
- 田澤安弘 (1995) 心的距離の観点から見た精神分裂病—ロールシャッハ・テストを媒体として. 臨床精神病理, 16(3), 287-303.
- 田澤安弘 (2006) 概念分析によるロールシャッハ解釈. 心の諸問題論叢 (印刷中), 心の諸問題考究会HP仮掲載中.
- Wallon, H. (1942) *De l'acte a la pensee-Essai de psychologie compare*. Flammarion, Paris. (滝沢武久訳 (1962) 認識過程の心理学. 大月書店.)
- Wapner, S., and Werner, H. (1957) *Perceptual Development—An Investigation within the Framework of Sensory-Tonic Field Theory*. Clark University Press, Worcester.
- Wapner, S., and Werner, H. (1965) *An Experimental Approach to Body Perception from the Organismic-Developmental Point of View*. In Wapner, S., and Werner, H. (eds.) *The Body Percept*, Random House, New York, pp.9-25.
- Werner, H. (1948) *Comparative Psychology of Mental Development*. International Universities Press, New York.
- Werner, H. (1953) *Child Psychology and General Psychology*. Mimeographed Manuscript, Clark University.
- Werner, H. (1954) *Developmental Approach to General and Clinical Psychology*. Mimeographed Manuscript, Clark University.
- Werner, H. (1955) *The Concept of Development from a Comparative and Organismic Point of View*. *The Concept of Development*. Conference at the University of Minnesota, December 1955.
- Werner, H., and Kaplan, B. (1984) *Symbol Formation — An Organismic-Developmental Approach to Language and Expression of Thought*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc. Hillsdale, Originally published, 1963.

[Abstract]

On Rorschach-Concept-Analysis as an Ex-Post Interpretive Activity:  
A Case Study of a Patient with Severe Symptoms  
of Blankenburg's Loss of Natural Self-Raising into Existence

Yasuhiro TAZAWA

The author discusses the method of Rorschach-Concept-Analysis within a stage of ex-post data operations that leans on a theoretical framework named "spiral ring model" of psychological assessment in which four distinct stages made up of initial interview, test administration, ex-post narrative and nomothetic data operations, and feedback sessions are interconnected in a loop. There are two sides of interpretive process to the concept analysis: one is a process examining the protocol for the most striking phenomena from the bottom up, and the other is a process examining the protocol by assessor's interests prior to concept analysis with a top-down approach. With the integration of the two aspects of the interpretation, an assessor ends up with experience-near understandings of the clients. Such a method is discussed in this paper through study of a patient with severe symptoms of Blankenburg's loss of natural self-raising into existence.

---

Key Words: Blankenburg's Loss of Natural Self-Raising into Existence, Concept Analysis,  
Rorschach Testing